古今和歌六帖

六上

特別
へ4
5301
1

古今六帖全部とりあつかはれし第一第四帖のうちのし換合
補ひ書ものは八綱となとも書ものゝ大綱ま行代のあとりく
補ひ古語しはしこゝろし古語あつめ漏たるをは考も
しるく古語あつめり さるよ是八ひとつ考へもなく書き
人きうまほしらるゝこれによる 契沖阿闍梨著書をもて
拾遺和歌六帖といふ一冊となしてみれは此書 誤あり
ありそうなくありぬるを 此集の前代の文に の もある
はらるをは侍るは 誤ありて 日本紀ホの国史萬葉集古今
好撰新撰萬葉新撰和歌古語りみえぬは見ぬ歌合
寛平千歌合 類聚集 神楽歌 又は本書よりさたむ乃

岡澤寄附
門 へ4 號 5301. 卷 1
昭和二十七年三月十七日 購求

又連歌ハ界の事にあらハしいひて三十六人歌集ハ今にあり
もあり百首もあり集などハしかもいはれしされども人ハいふ
本に書とくハ歌之事なく俳諧とあるハよき歌集
と謂と本に名ハなくて歌に歌集と謂と本に歌集（私云此間ニ脱文アルヘシ）
を俳諧なりて連歌ハ甚しく俳諧と有り人の事を記て読
今に連歌ハ此下書て甚歌集と謂と有に名なりて歌
集に見して是ハ家集に載し出俳之おもふみして連歌ハ本意と
俳諧と新古今に誹諧集ありて此中にも見る八果
の下の事の用に俳諧とつせよ給大和物語於是集詞

流集なとも今の風に俳諧と二もいひ其まるハこのなかに
とみしるふとにするもあるへしこれ界の事とかわり
ハ紛れなりとく面をかくしこれとおもひつまりなんと
ありふるまひとまるところ来としてある人ハかさまく
中ところへしてあたり俳者のかわりてあるへと謂るる
ここはよくよくあるへし句のかかり句れ中にその
かわりハ俳諧と本本にある文字れあやまりたるあり
はたるハいところのこまかくあしくあさるもあり
これの中ハ本末かなかるへし俳ありしこれと俳
ともとなふによりて也ハ申くしるへしりしかりやとおもふ

らはしことハありやのよしはとくりくれなそなの人
手のとつけりしハんかくうることあるく時のよみことゝて
となん記しまつるかく清あるともちらぬ集の時代艮
のそこといふを於後帝のあらそふまうん萬葉集ゝと記
しゐりしハいとくやしきものとひまとしはせんとくる
さあて此由をこ記しつゝおもふとゝあふしらうよしあはさ

安永七戊戌秋菊月十日

保田子菖渓記

新校古今和歌六帖叙

和歌者風俗而咸于天賦者也故古者公私之有攄唯慮不朽而已逮于世降人衰才乏薄識寡方不能無心教諭此書之出蓋初有心于斯邦始自歳時終至鳥類聚有篇凡二十五部五百十六事也旁捜日本紀日本後紀萬葉集古今集後撰集新撰萬葉集土佐日記伊勢物語及諸家別集等擴其軆躰採其英華和歌者流之所援用也世傳此書或名紀氏六帖紀貫之女所撰也蓋其為名取諸白氏六帖乎而今發讀異于古今集及貫之集者匪不多世之所傳誠難信矣然其書部類采録者有以不失文史之手

以所載作者粗推年代疑寛和以後才女撰之邪
惜乎彤管之所記傳貽紕繆之所寫闕誤
奥書或因書轉損題脱亦被雨湿句闕衍文兆騈
舛錯倫似支離凡厥混雑不可勝計就中註作者
或左右之或詳略之甚異常例宜乎後人為此見
註誤遂至以舊歌為新歌以新歌為舊歌余先是
註萬葉集此書摘彼集最多又仍互換異同而未全
備頃日熟思今不詳正愈失僻言猶究力鑚尋
今珍藏因茲據前諸書正之且拾遺集以下諸集
及大和物語證之先於此者上書之後於此者傍書
之以便披閲歌仙集及伊勢物語未詳與此孰前後
假准先上之其無所據考者姑闕以俟後同志
焉題加新撰兩字為號以別舊本如上件
當親披授書之于時元禄四年桐始華之
月也

沙門契沖

第二帖始神楽ノ三丁目新神祇之
以上十四丁今和漢ノ本ニ有之ヲ以
補ヒ畢ヌ　契師捨遺六帖出見本也
写之畢

右序并神脱文捨是以山家本書加之

寛政戊午孟夏和泉　葛陂

古今和歌六帖題目録　第一帖

歳時部

春

春立日　む月　ついたち日　のこりの雪
ねの日　わかな　あをむま　なかのはる
やよひ　三日　はるのはて

夏

初夏　更衣　卯月　うの花
神まつり　五月　五日　あやめ草
み無月　なこし祓　夏のはて

秋

秋立日　初秋　七夕　朝

葉月　十五夜　駒迎　待月

九月　秋のくれ

冬

初冬　神無月　霜月　かぐら

しはす　佛名　師走月　年忘

天

あまのがは　てる日　春の月　夏の月

秋の月　冬の月　雑乃月　三日月

夕づくよ　有明　夕やみ　傳

春乃風　夏乃風　秋の初　冬乃風

山おろし　あらし　さゝ乃色・あられ

村雨　时雨　ゆふだち　雲

露　しづく　かげろふ　にじ

霜　雪　あられ　水溜

煙　ちり　なる神　いなづま

かげろふ

第二帖

山

やま　山ざか　はる　麓

とうげ　くもり　むさし野　山川

山田　山さと　山乃井　山ひこ
いなほ　峯　くね　をやま
なはしろ　あしかま　せき　原
をか　こなか　岸根　みち
はたけ　田　むまや
麦乃田　夜比田　稲乃田　冬の田
かりや　野　いなおほせ鳥　うかは
春乃野　夏の野　秋乃野　冬枯野
はなれ野　かりは　こゑ　ゐし

大路　小路　ちし　はゝ
うまや　たなかゝ　たかむら　野へ
鬼山紀　都
みやこ　田舎　ゐなか　まちかど
國　郡　里　古郷
やと　在所　かきね
いゑ　家　とまや　井　ます紀
庭　みそら　かど　こ

ちうれし人　ここ　卅路
なま那　やんな　おや　うかれ
まいに　くるる　うし　むま
佛事
寺　鐘　かし　あり

第三帖

れ　あふ　やし　かも
みや　う　かあ　いと
あさし　かか　さとる　さとし
あを　たへ　かも　かとり

もし　たい　ぬき他　志らえ
瀬川　網代　や那　え
いも　ゆり　さま　さ紀
みもろの　うらかせ　けえ　かち
せせ　海　あま　まくらえ
しらか　しら波　あね　佐里
いかり　あみ　なみのそ　藻
みるめ　川里り　うら　かくれ
なか紀さ　し波　濱　千鳥
濱中よ　ほとき　いま　なかれ
三つはしかり　みかせ　とまり

第四帖

戀

あひ　かたらひ　夢　なかば

うらみ　涙川　うらみん　うらみても

なかうど縁　はつのこゝろ

祝

いはひ　四郷　はじめ　かざし

別

まよひ道　ぬさ　山を　そなた

かなしひ　なごり　こゝろざし　古き也寺

世にふる

第五帖

雜恩

ちかき人　いはほそむ　むかへては　あらためて

あしさ　しめ　あひらは　あひさらぬ

あひ人ならは　色紙でかは　いまでかは　人しかば

人まちてく　よるのまくら　なみの緑　ふるきかな

あかすも　あさ寝ぬはて　一夜へたてゝ　二夜へたてゝ

他へだてゝ　ゆく波まで　らへてゝ　袖へだてゝ

きらまではかり　よそのう　もろてかは　夜をくてあかき

人なきう　人なきを　人なよの　花のまみ

心をさく人　ゆふつく　正ならむ　思道源

心がける ひとつをと こころ淀 むかしより
むかあらん あつまる ちから 人にこそ
めぐらし そのほか ちよふ ほうらいを
人のほか 家につゞく さいやを 思ひつる
ふしとあるを 人にしると とうまるを なにとかなし
おもふまを なき給 つまりこに ましせに
かれつり ふるさとに 今なる様 ちんら かつらん

眼鏡

まちをを むかつる かに まとめれ
こう たま むかを むかしとき
かくこ まつる たまつる ちる

ちかき 塩やき 夜の露も あまつ紀
紅葉 かはり むかしも あさかつま
かへる露も あつまる夢 ほたる衣 舟とまる
雲 にしも おもひ 絹とも
あすみても みなと ちかく あきて
ゆきに や さら かつ都
さや ちる あすまる かさ
見れば かすみ 待と

亀

いろ とれ水草 昔紀 くらす
見るも

錦綾

みき　あや　にしき　わた

ぬの

第六帖

草

春乃草よ　夏の草よ　秋の草よ　冬枯草よ

ちくさ　みくさ　はつ乃草よ　山すげ

なでしこ　桔梗　をみなへし　ときは

しのすゝき　おぎ　らん　まく

くさみかへ　ふぢばかま　ほうせん　志のぶ

くずは　はぎ　かるかや　うや

そらして　かるかや　あさぢ　花かつら

はぎ　芦　ぬなは　ねなしくさ

あさく　うき草よ　はま草よ　ゝ遠草よ

志のぶ草よ　あやめ草よ　ちがや　なでしこ

よもぎ　むぐら　むぐら　くさ

さねかつら　あけびつる　あさがほ　あさぢ

はちす　かたばみ　あぢさゐ　はしく

ちくさ　つゆくさ　けいとう　えぐ

ゆりき　あふひ　まつよひ　ひるがほ

山ぶき　もゝけ　は　あふひ

かきつばた　みくさ　よもぎ　ちまき

いなご　虫　　しぎ　　　　　こほろぎ

すゞ虫　　せみ　　夜なけ　　かはづ

まつむし　　ほたる　　はたおり　　

きりぎりす　　くも　　てふ

本　末　　しぐれ　　たかね　　あけぼの

紅葉　　もみぢ　　もも　　かへで

松　　かへ　　とき方　　ときはぎ

むめ　　やまぶき　　御　　はな

みなもと　　花ざくら　　ひざくら　　はなざくら

いちご　　さくら花　　あふひ花　　しをに

さくら　　なでしこ　　山ぶき　　ゆり

とこなつ　　かきつばた　　くちなし　　ときは

むろ　　すみれ　　かつら　　かつら

あやめ　　かし　　藤　　ほうき

かしは　　かへで　　なでしこ　　ほしくさ

君影草　　ひさかき　　くず　　さくらさう

ふくらうし　　あふひ　　山ぶき　　ゆふがほ

かやつり草　　はまゆふ　　さねかづら

やまぶき　鳥　　さよちどり　　ひよどり　　かれ

はく　かめ　すくなき　わかこそて
ちとせ　よろこび　しま　わかこそ
はつね　たつとみ　かはらけ　かさね
もゝそ　ふくのかみ　はるなかめ

古今和歌六帖第一

歳時

春立日　睦月　元日　残雪
子日　若菜　白馬　仲春
弥生　三日　暮春
初夏　更衣　卯月　卯花
神祭　早苗月　五日　菖蒲
皆盡月　禊　夏盡
秋立日　早秋　織女　後朝
葉月　十五夜　駒牽　長月
九日　秋盡

初冬　神無月　霜月　神楽
師馳　佛名　閏月　歳暮

天

漢渚　照日　春月　夏月
秋月　冬月　雜月　三日月
夕月夜　有明　夕暗　星
春風　夏風　秋風　冬風
山下　嵐　雜風　雨
白雨　寒雨　夕多手　雲
露　志津久　霞　霧
霜　雪　霰　氷

火　烟　塵　雷鳴
電　景呂不

古今春上

春立日

そてひちてむすひし水のこほれるをはるたつけふのかせやとくらん　　紀貫之

上同

あさはてて紙の糸のゝ…ふるとしに春立…

家集

…春立とききつるからに春日野の若菜さへこそもえ出けれ…ききつる

家集　於道春

春たつといふはかりにやみよしのの山もかすみてけさはみゆらん

古今春上
藤家万葉

谷風　朗詠 … 同

山かせにとくるこほりのひまことに打出る波やはるのはつ花

むつき

万葉巻八

打みかるはるの門…御のもえいつるはるになりにけるかも　　大伴坂上郎女

志貴皇子のよろこびの御歌

作者注後人加之歟
假令雖有注誤也

万八
古春上 家集
古春上 流人不知
上同
万十
未詳
家集

新古今春上 朗詠 いはそゝくたるみの上の早蕨のもえ出る春になりにけるかな 足 万下同
志きのみこ
春きぬと人はいへとも鶯のなかぬかきりはあらしとそ思ふ
かすかのゝとふひの野守出て見よ今いくかありて若なつみてん
春やとき花やおそきとききわかん鶯たにもなかすもあるかな
藤原言直
今更に雪ふらめやもかけろふのもゆる春へと成にしものを
鶯の[illegible]春の山月のなかにも[illegible]
はるかの白
そせい法師
拾春 あすからは若菜つまむとしめし野に昨日もけふも雪はふりつゝ
山辺のあか人

万十作者未詳 赤人家集
家集
上同
家集百首中
万十
古春上

拾春 赤人 きのふこそ年はくれしか春霞かすかの山にはや立にけり
清ゆき
拾雑賀 きみかよの渡りにかへて百年の春の始は今日そとて
あさくしめるあたらしき春の始とけふをこそ
源のしけゆき
拾春 よしの山峰の白雪いつ消て今朝は霞の立かはるらん
のこれる雪
新古春上 梅かえに鳴てうつろふ鶯の羽白たへにあは雪そふる
貫之
かすみたつこのめも春の雪ふれは花なき里も花そちりける
[illegible]

家

万十作者未詳
赤人集

家

春立て猶ふる雪ハ梅の花咲ほともなくちるかとそ見る

みつね

うちなひき春さりくれはしかすかに雨雲霧あひ雪ハふりつゝ

よみ人しらす

続古今春上

春霞立るやおそきとみよしのゝ山には今も雪のふるらむ

家持

以下十一首古六帖鶯歌錯故不注之

打きらし雪はふりつゝしかすかに我家の園に鶯そなく

春乃日に霞よるひかり夕かけよりもなひきてそなく

鶯の谷の庭そ鳴峯にのほらは山ひこそなく

吹風を鳴てうらむな鶯ハ我やは花に手たにふれたる

三津絲

まつ人もこぬものゆへに鶯の鳴つる花を折てけるかな

春たてハ花とや見らん白雪のかゝれる枝に鶯の鳴

しるしなき音をも鳴かな鶯の今年のみちる花ならなくに

みつね

花のちる事やわひしき春霞たつたの山の鶯の声

のちかけ

たのまれぬ花の心をしらすして猶咲からに鶯の鳴

ちはや

鶯乃谷よりいつる声なくハ春くる事を誰かしらまし

ちさと

梅花散てふなへに春雨のふりてや鳴鶯の羽

貫之集

ふりてハ花とみへてあるものを春今更に雪のふるらん

万十

山乃はに鶯なきてわたるとも春とはいへと雪はふりつゝ　うちなびく　万

子日　　大伴やかもち

同廿

初春乃はつねのけふの玉はゝき手にとるからにゆらく玉の緒

つらゆき

家

子ねせてよみ松にひかれん春の野乃若菜も知らぬ我をまつかな

いせ

家

新後拾遺賀

はるの野にしけるまつにはあらねとも千代の神をはいのるなるらん

みつね

家

ねの日する子日の松はよすかにてあふみやまとに人をいはゝん

貫之

土佐日記

おほつかなけふは子の日か海人ならは海松をたにひかましものを　[illegible]　日記

家

春霞たなひく松のとしあらはいつれの春か野へにこさらん

たゝみね

家集追入

拾春

子日する野辺に小松のなかりせは千世のためしに何をひかまし

わかな　　赤人

万八

新古春上

あすよりは　八　万

あすからハわかなつまんとしめしのにきのふもけふも雪はふりつゝ

つらゆき

家

新古今春上

ゆきて見ぬ人もしのへと春の野のかたみにつめる若菜なりけり

仁和のみかと御哥

古春上

君かため春の野に出て若菜つむ我衣手に雪はふりつゝ

同貫之

かすかのゝわかなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

万十　家　万十　同千　家　古同　家

河上のいつもの花のいつもいつもきませわがせこ時しけめやも（さて 万）
はつゆき

わかやとの梅の花ちるひさかたの月夜にくもりはるかすみ（らゝ万）（つむらん）（あさくれ万）（さ 家集）
あをによし

みつとりの鴨の羽の色のあをうまを今日見る人は限なしといふ（羽乃万）（とふ万）
家持

なきのこる

たちかへり春は来にけり（新古春上 貫之）（貫之集無之）
月依
えつね

わか心春の山辺にあくがれてながながし日をけふもくらしつ
忠岑

春は梅秋はもみぢと見る花は（松春）
ちりぬるのちにさかり人をまちける

家　古春上　来彦　家　貫之集

鶯の花ふみちらす木の下はいたく霞のたちにけるかな（きと 家）
ながゆき

いつまでか野辺に心のあくがれん花しちらずは千世もへぬべし
そせい

ちる花をなにかうらみん世の中にわが身もともにあらむものかは（詞花集春 能宣）（能宣集不載）
やよひ

まづ咲ける花をし山の春風にたえずよるこそまちわびにける

ふる年の日
こぞよりもなるてかすみにけさは花もちらず春のうち（松賀 躬恒）（躬恒集無之）（是則集又載之）（あて 忠岑集）
さきそめね（年にかゝ 松）（あゝかぬ 忠岑）

霞たつ春の山べは遠けれど吹くる風は花の香ぞする
家持

百十九

家

かへる人のみをしみてあきぬらむ(?)花のちるらむ 春乃まて

貫之

家

さくら花ちりぬる風のなごりには水なき空に浪ぞたちける

みつね

古春下

新後拾春下

はるくと花を見る(?)人の心をハ春の限と思ふらむ

藤原おきかぜ

家集不載

たえず古 家集午(?)同

ちるとみてありけりや…一とせに二たびさかぬ花なれば

そせい

家

拾春 貫之 貫之集載之

花もみなちりぬる宿はゆく春の古里とこそ成ぬべらなれ

つらゆき

花乃もとにてくるゝ春(?)の限をしめて…

つらゆき

同

ちる花のもとに来てこそ鶯の…

同

花見つゝ惜む心は…あらましや…

たちぬの夜(?)

つらゆき

家

花鳥もみなゆきかひてむばたまのよのまにけふの夏は来にけり

いせ

同

いつこまて春ハいぬらん暮はてゝ別しほとハよるに成けん

古春下

花ちれる水のまにまにとめくれば山には春もなくなりにけり

ふかやぶ

家

鳴音(?)…月日もあかず…

貫之

ちるさくら(?)

つらゆき

家 百十九

家 又素性集

夏衣しらかさね池の波の色をくもあらなん
きさらきのあをやきそめしはなの色にまさるらん

[illegible]ゆき

家集百首中

拾 夜

花の色よそにもさしも打はへて卯の花の色[illegible]

卯月

未考

まつりをもやまたの神のまつりてやしる人ぞしる[illegible]

つらゆき

家

春過て卯月になれは榊葉のときはのみこそ色まさりけれ

卯の花

拾 文 讀人不知

躬恒集

山かつの垣ほに咲る卯の花は誰白たへの衣かけしそ

みつね

家集不載

むかし見し我古里も今もなほ卯花のみそかはらさりける

拾 雅春室さく

室之集

卯の花の咲るあたりはやまかつの垣ねならねと[illegible]

つらゆき

家

[illegible]白妙の卯の花かけに宿とりつゝ

さくら哉

百十

時わかぬ卯の花はさ月まつまてかくれなく

の方

後撰文 讀人不知

拾 文 讀人不知

後撰ニハ時ヲ卯月ト云ルを垣根乃内に咲る卯花

時わかすふれる雪かとみるまてに垣ねもたわにさける卯花

神まつる

そせいほうし

家集不載

拾 文 躬恒

神まつる卯月に咲る卯の花は白くもきねかしらけたるかな

家

卯の花の色をまかへてゆふしてゝ今日神まつる榊をそとる

又ゆふかけて 哉

貫之

同

神まつる時にしなれは榊葉のときはの陰はかはらさりけり

家

神乃ますもりの下草風吹はちるともなくもはなもまつけれ

志らかふ

五月

古今二

さ月山梢をたかみ時鳥なく音空なる恋もする哉

貫之

赤彦

さ月雨ハ苗とりわたる田子ならも人をと霞は袖をぬらして

新勅撰夏　寛平の時后宮歌合　読人不知

黄万

はてしなくて五月の雲ハ霞とハみゆる草ハ草のみなるらん

家隆乃世之夏　家集ものも見へる之の夏　見へる之の新勅

家集不載

五月雨ハ龍田の紙ハ人の袂なる迄白雲ハ

朱雀院乃孝衣にかよひ時たちえおに五月え侍りたかにおのれて流れたら雨てこれかれかきみえまくよ

躬恒

おりたちて見えむかし

大春日師範

後撰夏

五月雨ハ夜の闇ハ人なる時ハ郭公はやう名のりそよきなん

清ゆき

家

時鳥鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ恋もする哉

新勅夏　読人不知

はつきかる名をきく郭公たがさとに鳴らん

同

足曳の山郭公さみたれて夜の菖蒲のね(に)まさるなれ

拾遺夏　延喜御製

五月

家集不載

時鳥鳴やさ月のあやめ草あやめもしらぬ

清ゆき

家

清ゆき

結ひ置たるあやめ草もの人ハきのふ見ぬ

同

あやめ草

未見

はなへ(?)るみこと(?)かりてもあやめ草まきの軒ハ

そけ家

同

さ月まつ五月のあやめ草の葉に我もとなく袖のうへ

あやめ草ひきかへて今日ハ人のなにかかる

同

同

家集不見

続古今 友則

みかくれておふるさ月のあやめ草かをたづねてや人のひくらん

もまた知しに人ハひくらん 続古

みつね

家集不載

けふまでもあやめのあやめ草ねよあらはれてよ知ずて[illegible]

同

かくれぬの底よおふるあやめ草はやくあやめ草ねさへあふほどぞ人もしらん

貫之

家

あやめ草よねみな知をまたぬ[illegible]のみ知ぞしらぬあやめ[illegible]

同 麦方

はやあやめ草いくよのさ月あひぬらんくるとしごとにかへるらん

いく代れ麦

これ月

拾遺 忠岑 忠岑集

松かあるみ杜の下草よ夜をあかしてゆくも夜の[illegible]けるさま

忠岑

夜は清きはまもち宮の出にけるかげさよけり[illegible]

人まろ

家 万十作者不詳

拾遺 三 読人不知

みなせ河はちるまでに照月も紅葉の[illegible]をあらはにして

もま秋 君方 拾家集同

夜をもとめ見ひとよ[illegible]いたくもあれまくしの風のやまもとかぜ

有拾家集皆同 家集ノ用之

はるゆきて 家集同 けて

麦之集

拾賀 読人不知

なつしのびき人

さか月のみえつる猿よる人やまとその今のやまのたか

家

ひかりさす河の世をふるかひてもちよの夜は夏猿ぞん

拾賀 兼覧伊衡 延喜三年四年中宮大饗し侍りける屏風よ

みそぎしてかなしみやほよろづ代の神ぞしるらん

いせ

家

河門をまもてかくもあの波の花ぞたちよせつてゆる

貫之

同

新古今 貫之

月かげの見えしうちのせきふかなほ雲ぞうきてぞ波ぞたちける

家
躬恒集不載 赤人
拾遺読人不知 古今六帖之歌
宵ならて なかるゝ川のみやそも みるあまの河原[illegible]
みと川ゆけはおもしくなかるゝよるの[illegible]らん
みつね
家
とこなつのゆふへすゝしき[illegible]みえそくるよみちとそ[illegible]
伊勢
万四
君かあたりみゝとおもふにあまのかはら[illegible]
八代王女
万不載歟又 非上古体
赤人
立田川瀬のとはやみ[illegible]ふくかせにてもみちはなかるゝ
家一
秋またてあまのかはらに[illegible]のさして[illegible]
忠みね

夏のうた
夕月夜よはふけぬとて舟のさしのほる命やはらん
あまのかはらをしるしにて[illegible]
みしかよのふけゆくまゝに[illegible]やりて[illegible]
赤人
同
同
夏と秋と行かふ空のかよひ路はかたへすゝしき風やふくらん
みつね
古夏
秋立日
藤原としゆき朝臣
同秋上
秋きぬとめにはさやかにみえねとも風の音にそおとろかれぬる
同
つらゆき
河風のすゝしくもあるかうちよする波とゝもにや秋は立らん
同読人不知
きのふこそさなへとりしかいつのまにいなはそよきて秋風のふく

後拾秋上 読人不知
ゆふくれは風乃涼しく吹なれは日ともむすはれぬらむ

古今

初秋

初秋の宿は露けき衣手の露けき朝ほらけ
顕仲朝臣

古秋上 読人不知
秋きぬと目にはさやかに見えねとも風の音にそおとろかれぬる
みつね

あつまちの里は初秋の風のなかに秋あきをそ
同

順集 後古秋
末枯の荻乃初風吹にける衣手の秋の露そおく

伊勢集

七日の夜

風雅 秋上
彦星のつまむかへ舟こきいつらし天の河原にきりのたてるは
人麿

続古秋上 赤人
天河こほりもまの梅風はたなはた乃かよふ時はありけむ
人丸

万十人丸歌集出 人丸集不載

拾秋二 読人不知
こひ/\てまれにこよひそあふさかの七夕つめやあまの川なみ
みつね

拾秋 人丸
天河こそのわたりのうつろへはあさせふむまに夜そふけにける
人麿

万十後秋上 読人不知
くものうへにつまむかへふねこきいつらし天の河原にきりのたてるは

家集

むかしより絶ぬものとや七夕の一夜のちきり
むすひおきけむ

万十
あまのかはらに行人のつまのみそかに

古秋上 読人不知
天河紅葉を橋にわたせはや七夕つめの秋をしもまつ

玉葉 秋上 読人不知
万十
恋しくはかよひても見よ七夕のこよひのそらのあまのかはなみ

拾秋 人丸 人丸集
万十人 作者未詳
いつしかと待ちし七夕の夜はあけて白露に袖はぬれつゝ
あまの川

古秋上
契りけん心ぞつらき七夕の年に一たびあふはあふかは
興風

万十
大空ゆかよふ我すら汝がゆゑに天の河路をなづみてぞこし

古秋上 家
今宵こん人にはあはじ七夕の久しき程にまちもこそすれ
素性

万十
あひみらくあきたらねどもいなのめの明けゆきにけり舟出せん妻
人丸集

同作者
わたし守船はやわたせ一年に二たびきます君ならなくに
人丸

古秋上
天の河あさせしら浪たどりつゝわたりはてねば明ぞしにける
いせ

家
あま河に出て…たなばたの…
貫之

家集不載
秋風に夜の更ゆけば天川かはせの波の立ゐこそまて

家
銀河…かさゝぎの…

後撰秋上 家
…天の河…

家集不載
一とせに一夜つまなる七夕のいつとあふさ…

家
…七夕のあふ…

同
七夕は今やわかるゝ天河かはせに霧のたちわたるらん

同
夕ぐれのまちし天河とく七夕の…

家 同

古秋上 家集
川流人不知

家 同

百八

新千載 中納言家持
はるかなるいはせにまてし天河君かわたりはこよひなりけり

天河あまとふ舟をまちえてはなにかへるさの浪をたつらん

ひとゝせにあまのかはらの渡守かいもはなれて…てよ

松秋 兼恒
風雅秋上
なかめ日数や…ちらん天河きりたちわたるかせのまよひに

二…中毛方
ほしあひの…とらんあまの川…の…

傍原 王方

家
後秋上 貫之
家集不載
古秋上 忠岑
後秋上
家集不載

松雅 貫之
朝や明て露やこほれん七夕のわかれの袖の…らん

兼輔集并… 後は天川…
今はゝや…みなとのまへに…
かねとけ

七夕のあかぬわかれに天河舟出をしつゝ…らん

八月

ともみか

古秋上
家
百八
富士…
山…

秋風にうち吹かへすかけて…
向つ谷の…

人よりも先に声をやきくらん秋萩の…

家　同　公忠集　家　家集不載　家

十五夜

久かたの天津そらよりてらしけれはよそにも秋の月はみえけり

つらゆき

なかめつゝ昔も月は見しものを今宵は空に家ゐしてけり（又家集云久方ノ月見る人もなかりせは今宵ハかりはさしてあらまし　以上七依家集）

ふたつなき月見るときは山のはにいるも出るも心なりけり（又公忠集）

もち月の山の端いつる影ならてとまるそ山に影はのこれる

みつね

家とは（は）秋のなかの月なれとも空はくもらて照りにけり

とらね

いつくにも秋の月はてりけれとけふのこよひの影にしかめや

貫之

家　同　伊勢集　類集　後秋下恵慶　古秋下家

あふさかの関のしみつにかけ見えて今やひくらんもち月のこま（於秋貫之）

都まてなつけてひくはをかさはらへみのみまきのこまにそありける（忠見）

あふさかをけふこえくらんこまはなとはてのあかしの木のまにもみゆ

もち月の駒ひくときはあふ坂のこのしたやみもみえすそありける

藤原なりとし

あふさかの関の岩かとふみならし山たちいつるきりはらの駒（に是をえに）

なみたかし（こゝろ）あふさかのせきのしみつにかけみえて駒ひきわたすこまのかすかな

恵慶

なか月

ふりさけて見し月かけのはかりそめに秋はかはらぬいろにけるかな

つらゆき

素性
月ことに月ハおほけれとなか月ハみしかくもあらましや

万十
なか月の時雨の雨にぬれとほり春日の山ハ色付にけり

同
なか月ハ時雨の雨にやまもえて[illegible]

九日

素性
なか月の九日ことに百敷のやそうち人のこゝろてあそく
わきけり

後拾下
家
なか月の九日ことに摘菊の花もかひなく老にけるかな
いせ

家
かきりなく君かちとせをのいのるかな[illegible]
いへゆき

いくつて[illegible]月の菊の花ハ[illegible]植てみまし

家
百とせハ人よとしむも玉なれハあさゆふやくんて菊のうへの露

家集之
素性
[illegible]

貫之集
菊の花露とやおきゐて[illegible]白露

みな人の老をとゝむといふ菊ハ百とせやる花にそありける
よしみね

家集并貫之集ニ忠岑
帝帖忠岑又ニ兼出
をる菊の雫をおほみわかゆてふぬれきぬをこそ老の身にきれ
貫之

家
露なから菊にしおきてこゝろあらは千世のあきをもかねていはひしを
秋のうへて
たきかゝ

古秋下
家
こやまにおちたる滝のしらいとを[illegible]
人丸

百首 家不見

後秋下 兼之 家集不載

兼之集

家集不載

古秋下 躬恒 家集不載

後撰 躬恒 家集不載

兼房

古秋下 家

今日よりて明日もあらん神無月時雨よ後はふ紅葉ちかさん

なか月の有明の月はありなからはかなく秋はすきぬへらなり

散まても紅葉ちかのもとおるまて梅の葉のる鳥八さまかな

続後撰秋下 清慎公家屏風に 兼之

時雨ふる神無月こそ近からし山のみな人色付にけり

以上三首　　つらゆき

ひとりてハ行ゆん紅葉をぬさにたむけて旅はいかなる

いはのうへに秋は成らんたかつるあをなかまへは秋やなるらん

以上二首 紀　　みつね

紅葉葉をぬさとたむけて山をみちて紅葉の秋のとまりとこそ

紅葉を袖にこき入てもて出なん秋を限と見ん人のため

そせい

素性集不載

古秋下

兼房

後撰 流人不知

後撰 流人不知 兼之集載之

兼之集

古今流人不知 家持集

続後撰秋下 素性

紅葉ちる時まつて終もなしいつまてかは秋ハゆくらん

夕月夜小倉の山に鳴鹿の声のうちにや秋はくるらん

つらゆき

初冬

木枯の音にて秋はすきにしを今も梢に吹嵐かな

いつみな月ふるかとも宿る月時雨と冬をおもふなりけり

かみな月

兼之

神無月かきりとや思ふ紅葉のやむ時もなく夜さへ降るらん

ちはやふる神無月こそ悲しけれ

立田山錦おりかく神無月時雨の雨をたてぬきにして

霜月

古今誹諧 読人不知

はるたつとふるさとの人の…

後撰 読人不知

冬の夜の…

後撰 読人不知

吹風は色もみえねと冬くれはひとりぬる夜の身にそしみける

かくら　　貫之

家 交板

河社しのにおりはへほす衣いかにほせはか七日ひさらん

同

行水の上にいはへる河社河浪たかくあそふなりけり

同

あしひきの山のさかきのときはなるかけにさかゆる神のきねかも

同

榊葉のときはかきはにゆふかけて…

同

…あそふするかな…

同

やまんの…

以上六首　　はちゆき

古今 取物ノ歌

霜八たひおけとかれせぬ榊葉のたちさかゆへき神のきねかも

同

榊葉にゆふしてかけて誰か世に神のみまへにいはひそめけん

同

まきもくのあなしの山の山人と人も見るかに山かつらせよ

同

神かきのみむろの山の榊葉ハ神のみまへにしけりあひにけり

同

み山にハあられふるらしと山なるまさきのかつらいろつきにけり

以上五首

貫之 或本

いせ

家

としをへて神さひいはふ榊葉の冬もかはらていくらんとちへに
しられて

戸八

しられてみハあれ雪ふるとしらぬ梅の花咲めつらして

こゝ道みつ

古今
後撰 読人不知
古今 元方
万二十
家
同
古春下

みよしのゝ山の白雪はつもるらし古里さむくなりまさるなり
寞く雪るたかくなくふちかへりてふさへりて春を待らむ　とハるしに後
あらたまのとしのをはりになるごとに雪もわが身もふりまさりつゝ　ことゝ古
あらたまの年ゆきかへり春たゝばまづわがやどに鶯はなけ
家持

佛名
貫之
としのうちにつもれるつみはかきくらしふる白雪とゝもにきえなん　拾遺冬
君まさば山のかすみて冬あをも雪をつもりて行ゆるをそよ

うるふ月
四季に至をふにいでて一所にまく上乃卯紫比祈友非累乃歌を入たることなし
いせ
梅花まさく(?)はるに見人のあきあかぬや春(?)なれぬ
なゆき

後春下
拾遺
家
後撰 読人不知 右同
兼輔集
後撰 読人不知
古今 冬之
家集今
古春下

さくらはなへるて行へもしらぬ春よ(?)かすみてあはれなりけり　ゆきゝまへ後
時鳥後の三月もちるをてやなくしらつきをまてつる
いせ
ほとゝきすなくなるはなか縄の人こそしりけれ　比歳後
七夕ハ天の河原を七かへり後の三十日をみそきにハせよ　ゆく乱こそ後しま後
神な月かきりとやおもふ時雨ハひともまたすて冬をむかへ
あきのつまみ秋のあまりにありけれは鶯そや帰らぬ春　ゆく乱こそ後
どうのくれ
ゆくとしをおしむ心も続んかるなけく年のあまりに
みつね
梓弓春たちしより年月のいるかことくもおもほゆるかな　拾遺

古今冬 読人不知

雪ふりて年のくれぬる時にこそつひにもみぢぬ松も見えけれ

未考

くれてまたあくるあしたはいつしかと春ぞ来ぬらむ待つなる

家

貫之

古今冬 列樹

きのふといひけふとくらしてあすか川ながれてはやき月日なりけり

後撰 敦忠

もの思ふとすぐる月日もしらぬまにことしはけふにはてぬとかきく

同 読人不知

年くれて春明方に成ぬれば花のためしにまがふ白雪

貫之集

山のはに夕日さしつゝ

万七 家集

天をよめる

人まろ

あまのはら雲のなみたち月の舟星の林にこぎかくるみゆ

拾遺秋雑上 下句の星の林に 天の海にて 秋

あへのなかまろ

古羈 土佐日記

あまのはらふりさけみればかすがなる三笠の山にいでし月かも

あをうなばら 土佐

万九

天の原雲なき宵にぬばたまの夜わたる月のいらまくをしも

同十

古恋四

大空は恋しき人のかたみかはもの思ふごとにながめらるらん

新勅恋四 御殿宣旨

未考

已上三百 並未考

古恋五

ひさかたの天乃空にも住なくに人はよそにそおもふへらなる

てる日

古恋一 讀人不知 下夕月夜

あまてるやさすや岡への松のはゝいつともわかぬ恋もするかな

伊勢集

春乃日のてらす時にも身ひとつは底なき人の心つ成らめ

未考

雲ゐにててる日もくもる山の遠にあか月の月もみえなん

同

なをすまていをそねはなけるおかねさをのかさえてるらし

後拾春下

日もくれはほとゝきすらん夏衣ゆくとすゝしき秋の夕

未考

ふるさともおもひもえぬ旅人のあかねさす日をはるけきそ

同

入日さす時そとおもふ松村のつらなりてみゆとても

いはくみやなとゆふらんあまれとやまつのむかしのあまよ

なかつのそけるら

古賀

みねたかき春日の山に出る日はくもる時なく照すへらなり

万十

あさひさし常におほねきてあさの春日に

未考

雲もなくてらす朝の照日にも心もまよふ秋や何なれ

古秋下

おく山乃岩垣紅葉ちりぬへしてる日のひかりみる時なくて

未考

はるくれの花をとらて照日にも神な月にや妹をあはせて

家

なかりせはてらくる日毎の紙さのうちに入日はやさしけく常もえ

賓人之

古雜上

日のひかりやふしわかねは石上ふりにし里に花もさきけり

布留今道

後春上

古今

万十六 廿四帖 誹思言も

家持

古今

万十

同 後春中 読人不知

古今

万

はなのみなとけうくもまた日ころはなのこゝろさやか [illegible]

月のよのあはれにて [illegible] のあはれなる [illegible]

夕ぐれは [illegible] や [illegible] のゆかりとよもに [illegible]

貫之

年もへぬ [illegible] おもふ [illegible] 明暮に [illegible] くれて [illegible]

[illegible] とやかて [illegible] 日 [illegible] てゆくや

春の月

あさかとこ春日の宮は [illegible] 月 [illegible]

春 [illegible] 夕月 [illegible] 花 [illegible]

[illegible] かけも [illegible] 宿の [illegible] 春の [illegible] 月

[illegible] 梅の月 [illegible]

古今

同 貞風集

同 後夏 読人不知

古今

貫之集

古今

新五 帖待人

古秋上 読人不知

夏の月

夏の夜の宿やとけるとみるまてまあせて [illegible] 宿も照もて 月影

夏の月 [illegible] て [illegible] かけろふ

かくし [illegible] 夜 [illegible] 月 [illegible]

[illegible]

[illegible] の月 [illegible]

[illegible] の月 [illegible]

五月雨のたそかれ時の月影の [illegible] 人 [illegible]

蝉の月

木の [illegible] 月の [illegible] の [illegible]

後秋中
衣手はさむからなくに月影をたまらぬ秋の雪とこそ見れ（くもあらねど　後下同）

家
[illegible]

後秋下
秋乃月ひかりさやけみもみぢ葉のおつる影さへ見えわたるかな

家
[illegible]

同
[illegible]

以上五首
貫之

みつね

拾雑秋　読人不知
もゝしき乃大宮なから八十島を見る心ちする秋のよの月

古秋上
白雲にはねうちかはしとふ雁の数さへみゆる秋のよの月

大江のちさと

古秋上
月みれはちゝに物こそかなしけれ我身ひとつの秋にはあらねと

いせ

家
[illegible]

同
[illegible]

同
秋乃月[illegible]

未考
[illegible]

貫之集百首中
[illegible]

たゝみね

古秋上
ひさかたの月のかつらも秋はなほ紅葉すれはやてりまさるらん

もとかた

同
秋乃夜乃月のひかりしあかけれはくらふの山もこえぬへらなり

ふかやふ

後秋中　読人不知
秋乃月つねにかくてる物ならはやみにふる身はましらさらまし

同　深養父
秋の海にうつれる月をたちかへり波はあらへど色もかはらず

同　読人不知
秋の夜の月の光はあかけれど人の心のくまはてらさず
[illegible]

後秋中
[illegible]秋やまさらん久方の月のかつらの色もかはらぬ[illegible]

古今
秋の月山辺さやかにてらせるは落つるもみぢのかずを見よとか

万十
[illegible]秋の月[illegible]

冬の月

拾冬　読人不知
冬の池の上は氷にとぢられていかでか月の底に入るらん
貫之

家
[illegible]

後冬　読人不知
うばたまのよるのみふれる白雪はてる月影のつもるなりけり

古冬　読人不知
大空の月のひかりしきよければ影見し水ぞまづこほりける

拾冬　恵慶法師
あまの原空さへさえやわたるらん氷と見ゆる冬の夜の月

月

古雑上　読人不知　大和物語
わが心なぐさめかねつさらしなやをばすて山にてる月を見て

家集不載　拾雑上　貫之
[illegible]

家　玉和下　貫之
[illegible]

古雑上　貫之
かつ見れどうとくもあるか月影のいたらぬ里もあらじと思へば

家
ひさかたの月[illegible]

土佐日記　海路にて山の端に見し月をこよひ波の上に見て
都にて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ

以上五首　貫之

古雑上 家
あはれ我袖とだにして庵に出てし出る月影
なかりけり

同 伊勢物語 末彦
あかなくにまだきも月のかくるゝか山のはにげていれずも
あらなむ

後雑上 家
いふへたにかはる袖をみかつき乃月かけひとつのうへをもらる
みつれ

古恋五 家
ひとなきやみそまよひあかる月新をもみやいらん
いせ

あひまはれておもふ袖の我神にやどる月さへあふる新かな

いはくふら□のあれくる山倉の山は我もやかなん
ゆやかふ
みん流れ

家 新古
あさぢふにあさとめよし月のちらぬ雲をあひ
見えこ

家
てる月をひるとみまかふ暁に袖かくしまもあかしもへふ
袖を濡

万七 作者不詳
まそ鏡てるへき月を白たへの雲かかくせるあまつ霧かも

同
山のはにいさよふ月をいてんかとまちつゝをるに夜そふけにける

同十六
三ひとみのこちらし山のくれ出る月のあまり[illegible]

古雑上 詠人不知
たそかれ照る月もあまた見え此山のあまのをりの情出つる

末彦
久かたの天照月は清くそあまたの影をとらん

古雑上 業平 伊勢物語同
おほかたは月をもめてしこれそこのつもれは人の老となるもの

万四
うつむ乃ての夜の月に今まても我にも君よまて

万七
百敷乃大宮人はまかり出てあそふ今宵の月のさやけさ

万三 又九
倉橋乃山をたかみかよこもりに出くる月のひかりともしき

同六
あめにます月よみおとこまひはせむ今宵のなかさいほよつきこそ
湯原王

後雑上 土佐 野岑雄
伊勢物語 紀有常
[illegible]
おほかたは峯もたいらになりなゝむ山のはなくは月もいらしを

万十一
我せこかふりさけみつゝ歎くらん清き月夜に雲なたなひき
安都扉娘女

同四
みそらゆく月のひかりにたゝひとめあひみし人の夢にしみゆる
安倍の虫麻呂

万六
[illegible]

赤人
[illegible]

同
[illegible]

同
三日月

万六
月たちてたゝ三ヶ月の眉根かき気なかくこひし君にあへるかも
坂上郎女

同
ふりさけて三ヶ月みれはひとめみし人のまゆひきおもほゆるかも
家持

古雑躰 読人不知
よひのまに出て入ぬる三ヶ月のわれて物おもふころにもあるかな
[illegible]

赤人
ゆふ月夜

古今一　読人不知
上照日已出

夕づくよさすや岡べの松乃葉のいつともわかぬ恋もするかな

い（へ）乃にとも露もれ

万七　作者未詳

むさし野の草葉の露のおきて見る月

同九

旅にしてなかくものおもふ月

家集　万十　作者不詳

あら人

未考

まき（もく）の山の夕月よ清くてらしなる

万七

夕月よかたよりて人にをとめて雨雲をしのぶ

同八

清ねつきも心をのこもの我ぬ月乃すまかくれ

古今六帖三

夕月よ心もしのに白露のおくこの庭にこほろぎなくも

家

あるもなけ

つきも

あかあかのつきまさるみえつ

未考

宵の間は姿もかけても月なれ

人よ

家　万十　作者未詳

なか月の雨の有明の月よありつつも君しきまさばわれ恋ひめやも

未考

世の人はさくらの雨の花にもかりをしろ

家

出ても思ふもたえて有明の月

万十

白露をむらさき山の月

貫之

同

時雨ふる暁月よ紐ときて恋ふらむ君と居らましものを

ゆふやみ

万十一

妹があたり出ぬ月よ月のかくれのもいり

後撰五　読人不知

夕やみは道たづたづし月待ちて行ませわがせこその間にも見む

万四
ゆふやみハ道たと〳〵し月待てかへれ我せこその間も見ん
大宅娘女

ほし

未考
日くるれハ山のはいつるゆふつゝの星とハみれとはるけくありけり

同
我恋ハ空なる星の数なれや人ことしけき世のかなしさ

同
東路のみちやはるかにかりまよふ雲のひまより見ゆる星かけ

同
月影はさやかなれともなかなかに星のひかりそあらはれにける

同
宵のまはゆきかふかたもたえつるか月にかゝれる雲のあとゆくへ

万十
ゆふかけにかよふあまの川なみのはしわたしてあまつ星あひ

未考
露をのミはらひし袖のよることにほしまつ空のゆくへしらなく

春乃風

未考
春風乃吹にしあしたたま〳〵もの氷もとけて花やさきける

古春下
花の色ハ霞にこめてみせすとも香をたにぬすめ春の山風
良岑宗貞

同
春風ハ花のあたりをよきて吹け心つからやうつろふとみん
藤原のよし風

家集千載
吹風をいとひしまても梅の花散る時そともしられける
みつね

古春下
かねてこそ山のはまつハ吹風ハ花のちる〳〵
もとかた

未考
十五怡人傳
重出
春ハまつ東路よりそ来にけらし家つと花のさくをみよ
ともみか

古春上 家
同春下 未考
万十七
未考
後春上 後人不知
家
同

花の香を風のたよりにたくへてそ鴬さそふしるへにはやる

とものり

花ちらす風のやとりハ誰かしる我にをしへよ行てうらみん

はまさなた花人吹く山風ハ行こゆる吹くつゝそ

春風のいとに吹るゝ此浪の錦をきるに春まきの色

春風ハ花のあたりを吹まて秋吹なえぬ色なくてこそ

ふるさとのみやこわたるものをけふそこの風まかせ

吹風や春たちきぬと告つらん枝にこもれる花咲にけり

伊勢

春の錦の糸中またな吹ゆくにもかゝる里行花をこそ見んや

我よみのかとふる春風の下に花さく

家
夏万 九五帖異言丈
未考
夏万
未考
夏万
家
同

夏の風

よしね

けふといへはとけて夏山のしけみの風ハこゝろもとなく
夏の風ねさめにとまりはて人の床に寝て
吹風も秋やまくらに夜の風ハ月の影もてらすかな
夏なから河風涼しまたらてよもすからなる
あさねかみひきかゝる松風ふきて鳴蝉の声

はしゆき

雨ふれと吹松風ハ雲のまて池の河にまとゐせん

おもしん

涼しさよまた木の下風の吹くれハ夏のよなからも秋そしられる

秋の風

万四又八 六二帖纂童出
君まつと吾こひをれは我やとのすたれうこかして秋風そふく

家持集
秋やとの[illegible]のしら露の[illegible]秋風の吹

未考
[illegible]秋風吹

同
[illegible]のしらすゝき[illegible]秋風[illegible]

万千
[illegible]秋風[illegible]

未考
初風[illegible]吹[illegible]ものゝ[illegible]

家持集
秋風[illegible]

後秋上 讀人不知
[illegible]人の[illegible]

万八
[illegible]秋風の[illegible]

未考
[illegible]

万十
[illegible]初の夕風

古恋二 素性
秋風の身にさむけれはつれもなき人をそたのむくるゝよことに

貫之集
風[illegible]秋風[illegible]

以上二首

貫之

古賀 躬恒集
住江の松を秋風吹くからに声うちそふるおきつ白浪

素性法師

後秋上
秋萩に[illegible]風[illegible]

ならん

未考
[illegible]秋風の[illegible]

ちらしや

同
[illegible]秋風の[illegible]

古秌下

きのよしもち

紅葉せぬときはの山に吹風の音にや秋をきゝわたるらん

古恋五

とものり

秌風は身をわけてしもふかなくに人の心のそらになるらん

後秋上 読人不知

たのめこし人をまつまは秋風は今や今やと待わたる荻

万十 并五帖 我背子 衣宣出

わかせこか衣のすそは秋風のやとまて沈露下まてまちかねて

吹くれは身にまさる秋風をまちわひぬと思ふらん

冬の風

後冬 読人不知

吹風をなくさみかねて名のれは袖の人の身をそしらぬ

人まろ

万十 作者未詳

河瀬の山風はさむけれと衣をうちかねて宿かす

山おろし

万十三

夜はすから山風吹て寒けれは衣手さむしねをやねなまし

せうし

古秋下 読人不知

恋しくはみてもしのはん紅葉を吹なちらしそ山おろしの風

万十一

海ならて月はてらさし足曳の山下風は寒からし

あらし

未考

山里に住しもよしや人もとふあらしの山に偲しき

一本 はきの嵐も山も吹くあり川のつゆき 山かせそあり宿やかさん

ふんやのやすひて

古秋下 文屋

吹からに秋の草木のしほるれはむへ山かせをあらしといふらん

未考

枯わかれも秋の夕暮まつ木のはいつしかの風や行らん

古雑下 読人不知

わかのみの此風にそやけまさる思ひはあれは偲けれ

未考
同
古雑下
伊勢物語
十二佑山宣出
未考
同
万九
古雑上

秋は宿りやとも紅葉の色ゑあらしとなりにける哉
とふ人も今はあらしの風たえてやどるてるしん月やなかぬ
かゝやゆゑのとしのこ

雑風

風吹ば沖つ白波たつた山夜半にや君がひとりゆくらん
吹風に秋[illegible]
あらしの音は[illegible]
さらぬとも身にしみてわたるあきの風[illegible]
浦波の[illegible]風の[illegible]
天津風雲のかよひぢ吹とぢよをとめのすがたしばしとゞめん
よしみねのむねさだ

あめ

未考
万四
同十
同
同七
同十
同十一
同
同七
同

雨ふりて[illegible]
[illegible]のかさ
いそのかみふるとも雨にさはらめやあはんと妹にいひてしものを
春雨に衣はいたくとほらめや七日しふらば七よこじとや
今更に君はゆかじな春雨の心を人のしらざらなくに
わきもこがあかものすそやひづちなんけふのこさめに我さへぬれな
秋[illegible]春の雨[illegible]
いもがかどゆきすぎかねつひさかたの雨もふらぬかそをよしにせん
[illegible]雨の[illegible]
[illegible]雨は[illegible]
[illegible]雨の[illegible]

万四
ひさかたの雨もふらぬかあまつゝみ君にたくひて此日くらさん
ある人

家
万十 作者未詳
春の雨にありけるものを立かくれ妹か家路に此日暮しつ

ひさかたの雨にぬれつゝあきつしまやまとなてしこ
みそてぬれてたちぬる山の春雨に花の下にていかにふるらん
としゆき

後春下
春雨の花の枝よりなかれてはなほこそ香にもにほひあかなく
なりひら

古恋三
伊勢物語
おきもせすねもせて夜をあかしては春の物とてなかめくらしつ
なりひら

同
つれつれのなかめにまさる涙川袖のみひちてあふよしもなし

茇万
古春上
読人不知
未考
後春中 貫之
古春上 貫之
同雑上 貫之
家集下 恋
未考
同

桜かり雨はふりきぬおなしくはぬるとも花の下にかくれん
水の面にあやおりみたる春雨や山のみとりをなへてそむらん
はらひてて春雨のふりぬるものをいかにしてかはとはたてん
花ちりて袖のみぬれて春の日はなかめくらせる妻のあかれけり
みかさものてことに見えぬ春雨のふるやむすれは君かたのまん
わかせこか衣春雨ふるかことに野へのみとりそいろまさりける
雨によりたみのゝ島をけふゆけと名にはかくれぬ物にそありける
かわくまもあらぬなみたにぬるゝ袖ふる雨にさへまたもぬれける
以上四首
貫之
春雨のふるとは見えぬ山桜花ちる程にぬれてこそゆけ
春雨のふるさとにては清くしていとゝとひのもゝやとらん

未考
浅ましのなかの我いたかなかれ浅き空にもみだれけり

同
あをやぎの糸よりかけし白露のやまとにもかゝるなれども

同
ふるとしもみえでふる春雨ハ花のしづくに袖ぞぬれける

みつね

家
春雨ハ昔にかはれども松坂の雲居はるかに見えし山のふもとは

未考
思ひつゝ思ひ?ゝ春の雨のふるとてかへるまじきを

なりひら

古恋三 伊勢物語 百十二
かずかずに思ひおもはずとひがたみ身をしる雨はふりぞまされる

そせい 或本

ひさかたの雨のふる河の清ければ人のこひしき

そせい

家集不載 後春上 読人不知
よそにありてきみのみなかすよる人の心はしらぬかな

たつ雪の春のをそき春雨のふるもみどりにあはれなりけり

いせ

後春上 読人不知 家集不見
またもあらで我身ふりゆく世の人の心乃花にちらなむ

貫之

家集不載
ひとり雨にぬるゝ袖なれは我やなるらむかゝる世の

後春上 長谷雄
春雨のふかきけりや白露に我なるる枝にかゝる

未考
あな人をあなたはたゝに

同
花のやしかの雨ハふりくる春雨の山井にかはる

貫之 或本

後春上 読人不知
春雨のふるに山への海見えん梅の花ちるさかりとかや

家集不載

やまれたや心もとなくしくれの雨のふりさためたる秋の宿とはいふ　みつね

家

しくるゝそ深き色にはなりぬらんしくれの雨にもみちしてみゆ　伊勢

万十 人丸集

かみな月時雨にぬれてもみちはの散りくるやはゝそのもりの[illegible]

同

しるやいかに時雨の雨もまた[illegible]して[illegible]

未考

人とはしをもひしかとも時雨の雨になかぬ日はなし　[illegible]

万十

もみちはを時雨の雨にぬれつゝも[illegible]

未考

ふるさとの[illegible]なる時雨の雨の何とかは[illegible]

万十

秋田かる旅のいほりに時雨ふり我袖ぬれぬほす人なしに　人まろ

(かりほのい)

同

一日には千重しく/\に我恋ふる妹かあたりに時雨ふれみむ

同十九

此時雨いたくなふりそ我妹子に見せんかために紅葉折りてん

未考

時雨のあめまなくしふれは神なひの森の木末も色付にけり

万十

[illegible]あしひきの秋萩の時雨のふるまゝに[illegible]　人麿

同

[illegible]しと秋の[illegible]長月の時雨の雨にぬれとほりて君待人を

巳下五首家集

大空は[illegible]神な月時雨ふるらし秋の[illegible]　貫之

[illegible]あけしと我か[illegible]のたえす[illegible]

[illegible]人はこひしと[illegible]秋の[illegible]時雨の[illegible]

貫之集
万十
未考
後冬後人不知
同 同
同 同
同伊勢 伊勢集

紅の時雨ふりつゝやいそのかみふるとかみしもみちはいけん
雨ならて時雨といへは紅に木の葉のそめてちらぬ日そなき

以上五首　貫之

人めかる秋にはあへすやまさとも被しもきえてくる
白露はそめもかくさぬ緑山に時雨そふれてあかなく
神無月のちる菊の花しもにこの雨はふりにけり
初時雨ふれは山へそおもほゆるいつれのかたかまつもみつらん
初しくれふるほともなく佐保山の紅葉あまねく色付にけり
神無月とはしくれあひの山の雪はふかくなりけん
なみたさへ時雨にそひてふるさとは紅葉の色もこさまさりけり

ゆふつち

未考
万十又十六
未考
万三
同十一
日本紀廿一 古事記上
古今二家集 貫之集下

ゆふさりて夜はいなあめそふらんはいつらへん
夕立の雨ふりすきは白妙の白露消
夏の日のふくさふくるかさののけなしまて
くも
霞やはたにかゝれる白雲のやまはにつれてまさ
わかせこかさけて顔らん清き月の雪まさりける
すさのをのみこと
八雲たついつもやへかきつまこめにやへかきつくるそのやへかきを
たゝみね
風吹は峯に別るゝ白雲の絶てつれなき人の心か
貫之

家 古別　白雲は八重にかさなれる遠にてもおもはん人に心へだつな

万　おほ宮はあさ海さん白雲のミえかくれするあまのつりぶね
人麿集　或本

同 弓削皇子 才二 佐山家　滝の上のみふねの山にゐる雲は常にあらんとわがおもはなくに
人麿集

万拾 家集 不載　おほかたのこらんといのこくちは峯の白雲とミえぬる
なかめし人

万十 作者未詳　梓弓春山ちかく家ゐしてたなびく雲のやまずこひんとおもふ

古恋 読人不知　夕ぐれは雲のはたてに物ぞおもふあまつそらなる人をこふとて

赤考　まき山に立わたる雲よ見えずともあひみん人にわがこひやまず

同　あしひきのやまとなる雨雲の峯にてはなれてや
かゝる行

万四　かすが山あさゐる雲のおぼつかなくしらぬ人にもこふる月日に

古雑下 千里　芦引の山の桜さくまで帰るらん雲のうへまでつゞくかん
ちかふる

古物名 淀川 貫之　あしひきの山べにいまは白雲のかくせぬ月とやはみぬ

赤考　足曳の山にたなびく雲はいつしかとこえゆかん
を

後別 橘直幹　ふるさとの雲ゐのはるかにかへりゆく人をみんとや山の白雲
あきらけき

貫之集　雨ふれば山よりいでゝ白雲はたなびきわたるかも

百十　はるかなる雲立ちて出ん月をたが山の峯にまちえて
かつらぎ

同九　よそのみに雲立ちわたるかつ雨もふりぬとやいふ行かへる

同十九　かきくもりあまつ雲のなかにゆきまた

万葉并家集不載

はほ山にまかへる雲のあなたにはおもひも今そきこゆる
中務

同

よそにこそ雁かくれもなき山にまかへる雲のあなたにもありけり
いせ

家

白雲のたなびく山のみやまにいりて月影もよふかき
貫之

同

なにはなる秋人もなしとて雁かねの白雲かける宮のうへ
よみ人

同

きらぬとやいふは中々白雲のたえまに霜はおくらん
とものりのたちより

後雑一

世の中はいつらわか身のありてなし雲のうへはあはれとも
露

後雑一

あはれしもうちしのひてもあかつきにはかなくなりけり
はるのまつりに
躬恒

後秋中
家集不見

秋の野に鹿のたちならす秋萩に置ける白露ありけめて
よみ人

後秋中
家集不載
菱乃

秋の野の草はいつともみえなくに白露をむすめる
夜の月にかゝるやとの草はむすふの露は見えらん

未考

古大哥所々載

みつのいてんささやきもせす袖のあやしくはらふ露は雨のみか
はるのみち

後恋二
家下

きみ渡る秋のみはなれをみるまつ恋わたりあめの下の野へにおきて
躬恒

家集不載 万十作者未詳

家集不載

未考

貫之集

同

未考

貫之集

未考

後秋中 読人不知

やかもち

白露をとらはけぬへしいさやこし露にきほひて萩のあそひせん

いせ

てらねくて[illegible]白露の[illegible]

秋乃夜の露をは露と[illegible]

[illegible]白露を[illegible]

[illegible]

白露に[illegible]秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

秋の[illegible]

古秋下 読人不知 或万

万十 作者未詳 家集不載

万十

古恋三 業平 伊勢物

後秋中 清正 清正集不載

万十

未考

後秋中 読人不知

後秋中 家集

秋乃露いろ／＼ことにおけはこそ山乃木の葉のちくさなるらめ

家持

秋萩にをける白露朝な／＼玉とそ見ゆるをける白露

秋[illegible]白露[illegible]

秋の野に篠分しあさの袖よりもあはてこし夜そひちまさりける

[illegible]白露の[illegible]

白露と秋の萩[illegible]

白露の[illegible]秋[illegible]

[illegible]白露[illegible]

いせ

[illegible]

後秋中 法皇御製
拾遺集
百十
右同
同十一
古今下
後秋中 家集
黄門

白露のかゝるまなくもおもへはかねての露をあきのそら（えたの内れし）
秋萩の咲る野への夕露にぬれつゝきませ夜はふけぬとも
鳴鹿のよそにきく白露のいちしるくも秋をしれとや
あきはきの花をちりはてゝ白露の涙とおもふ（おもひとい）
白露はかねて乱れて咲をみれは秋の夜なかく思ふかな
秋萩の上に白露おきにけりたゝ見てしのふことの葉を
待わひてきしにも白妙の衣手にこそ露はおきけれ
いつや申
白露のまよふ夕の風にふかれても秋の夜なかくなりにける
さゝ
萩の花咲く秋萩の白露はかゝるかけてもおもはさりけれ

未考
反則集不見
是之集有之
百十
同十一
同
後撰四
恋五 忠岑
古今下
詠人不知
百十
古今上
詠人不知
未考

なゝまてに秋の月の白露はかゝれる玉を誰かしるらむ
よみ人
草葉に露のおくもあれはかけて袖にかゝる露かな
はかなの秋風よ吹秋の花にちりて白露はおきまし
白妙の秋の露はかゝれはわか袖は涙にて
ゆふされて秋風吹ぬ白露の宿る草葉にいとゝ置ゆる
秋の夜の草のたもとはわか袖にかゝる白露
消もあへぬ山田の露をかけにける露にあかぬ白
秋は朝霧の下露はおく野の下に置まとふ
おきてみんとおもひしものを萩の花もとに露をとひつゝ
いはでてもかゝらぬ秋の夜は露のおいてゐるかな

百八
同十
旅人は秋はとて白露のかけたるに落る涙の色てあかねて
あきことに野の枝にこそ露置て空くもる月の影そやとる

たゝみね
古秋上
秋乃夜の露をは露と置なから雁の涙や野辺を染らん

貫之
同恋二
露ならぬ心を花に置そめて風吹ことに物思ひそつく

未考
露むすふ秋はきにけり風吹けはあきにしはなの色連

同
露とてもあさやかなる秋の月の影ハまさに紙色に
しほく

百二
阿しひきの山の雫に妹まつと我立ぬれぬ山の雫に
女

石河女郎
同
和まつと君かぬれけん足曳の山乃雫にならまし物を

貫之
家集不見
木葉にちる露の雫にかゝりて雁のうはけはぬれてそ行

貫之集
菊乃花雫おちぬとひちぬれの心乃色を継ぬらん

遍照集
末の露もとの雫や世中のをくれさきたつためしなるらん

僧正遍昭
貫之集不載
家持集有之
時鳥まつとせし音や雫におほれてやなくらん

百十九
足曳乃山の紅葉に雫あひてちりゆく山へ行宿や

貫之集不載
時雨ゝは紅葉の雫にぬれつゝおやまさりてぬれまさりけり

古物名歌
数行
から萩の露の雫にぬれつゝ花よりも色まさるらん

以上二十首

貫之

万七 古歌集出 家集不載 才二帖山重出

家集又貫之集 哉怡九日巳出

家

同

万十

古春上 読人不知

人麿

うば玉の黒髪山をけさ越て木の下露にぬれにけるかな

素性法師

おる菊のしづくをおほみわかゆてふぬれ衣そ老の身にきせ

伊勢

ふかみ夜の君をかさねて花の色ぞ雲とぞ見ゆる霞はけさとや見めら

おすし

白雪の降りて積れる身はふりつゝも絶えぬ山まさへ かくあけける

かとこ

冬ごもりて春去来れば朝日さし かすがの山に霞たなびく

春霞たてるやいづこみよしのゝ吉野の山に雪はふりつゝ

同雑下 菅原勝臣

貫之集

後春中 興風 興風集

古春上

才二帖忠岑宗出 彼云躬恒云云 躬恒集不見

古恋三 読人不知

万八

古春下 貫之

未考

同

同

人遠とふかいは春霞立へだつとも君があたりみえずもあらなん

河と見るもまた春霞かゝりけるのはるかなるかな

山風の花の香かどふふもとには春の霞ぞほだしなりける

春のきる霞の衣ぬきをうすみ山風にこそみだるべらなれ 行平

志らまきの見れは立霞え(?)れとも袖にほひしけれ

君をのみ思ひわびぬれば春霞たちて山かくしらめ

心うき物は春霞たちてかくれ(?)の外ゆけるを

山とふ見えてかくしもら春霞人まちて通ふ花やちるらん

花の色をやとしてかくし見えし立かくして霞をはらふらめ のみ(?)へ

春霞てかゝれは山の端はうつろひて去てまし

山桜乃なげきさへつゝむ霞やまた煙とはなる

未考
夷之集
夷万
古春下
後春下
万十
同
同
同

霧立山乃おくにれゐるも木陰に[illegible]とけいてんとさてよ

鶯の羽風をさむみかとうたふ霧のおれいまやさけらん

霞しくてき白妙山を見渡ハ小松か枝に霞かゝるらく

山乃はに移り行ましりハ春霞たちてもうきて[illegible]

まさきしくのひく雲[illegible]ら之ゆ見えて[illegible]

春霞たちさく[illegible]人におと[illegible]山の[illegible]乃[illegible]

秋をとくとふかく[illegible]めきて霞[illegible]より[illegible]下ゆめ

[illegible]

せみくて[illegible]山よ[illegible]中に木のえ[illegible]のきて霧[illegible]

かけろふの夕さりに[illegible]雲への[illegible]霧や[illegible]

[illegible]

同
同
万八
同十 人丸集
上 聖日已出
家
万十
万二 人丸 長歌末
古雑下 読人不知

[illegible]の上に立霞立こてゐてかすみのまゆ

見渡せハかすみの野へに立霞見まての[illegible]

[illegible]山のつさくみを[illegible]霞のさて[illegible]

時ハ今ハ春に成ぬと[illegible]山へに霞[illegible]

無[illegible]霞立[illegible]のま白[illegible]て[illegible]

貫之 武本

[illegible]んやこゝろん花を摘[illegible]の立かくし[illegible]

ことわり

人麿

春山乃霧にまよへる鶯も我よりまさりてものおもふらんや

夕されハ[illegible]て花の[illegible]の君[illegible]

[illegible]の[illegible]のつま[illegible]のこ[illegible]

未考
龍田山のふもとを見てはかりにぞ山の本(?)に(?)ゆく(?)

古恋二 躬恒
秋霧のはるゝ時なき心にはたちゐのそらもおもほえなくに

貫之集
春はさく花にふかくれハ龍田山の衣(?)かけて(?)流(?)るゝ

古恋一 読人不知
白雲のたつたの山のかひよりもかゝりてぞ龍田の霧ハ立ける

躬恒集不載
あさなさな立河霧の空にのミうきて思ひのある世なりけり

未考
千鳥なく佐保の河霧立渡りつゝ遠る人を恋わたるかな
みつね 武存

後秋下 是之
流れてはたゆる人もなき心ぞ流(?)れ果は龍田の紅葉を流しこそせよ

未考
龍田霧の立のをかくもと紅葉ばのおかつるみやまあなかしこ

後雑 伊勢
時雨には雨もあぬ(?)紅葉は(?)龍田の山にかゝる霧かも
秋とてや今河霧の立ぬらん龍田の山の紅葉ちるらむ

伊勢集
いかなれば同じ河霧の立こめて(?)龍田の山のふもとをまもる

貫之集
山わけふかく入やまぢをきて河霧の立出る今(?)龍田山

未考
龍田山の立ちかへる時ハくもりみ(?)山の雲まに霧立てゝこそ

後秋下 読人不知
見るごとに龍田もあるらん紅葉ばやはれて(?)山にてる

未考
河霧の山もとをへだてゝ立かへりてぞ龍田の山ハ見ゆる

同
龍田山そこはかとなく霧たちて龍田の山の紅葉見えける

後秋中 読人不知
心みる紙(?)にゆめやハ秋霧の立くもれてかはつけゝる

未考
流るゝ河秋霧ハまかせてそ見る(?)

古大歌所 御歌(?)
龍田山の霧ハ(?)あけて見るよしもなし

あしびきの山の紅葉の…(?)

あさなけハしくれはあらん秋萩の色まされはみな露とちらん

万九 河霧のたちわたれまて袖のうらハぬれつゝひとりねをやなくらん

末考 うつせみのよるしらぬ袖のぬれしのふるやみなきりなるひとしきよ

万九 妹かあたり我か山のちかへりはちかめてたちまちかへりつゝこそ

貫之

同上 ちはやふる神なひ山の紅葉はゝ秋のやまのみちしる人もなし

万十 秋されハ雁とひこえて竜田山たちてもゐても君をしそ思ふ

あしたの河かせのよ河をせの露のさえたる君か袖かな

霜

古大秋行の歌 夫婦ゆふされハ雲ゐに秋のしら露のをりにかりのなけは

あさなけに河のせよりまさる露のまへかさし秋ハ思ひまさるかな

末考

古恋五 伊勢 伊勢集 冬枯の野へと我身を思ひせはもえても春をまたまし物を

後撰 読人不知 三紙星けて露やおくらん天の川はあたかはせ流るらん

古恋二 紅のふりいてつゝなく涙にハ袂のみこそ色まさりけれ

万七 露くさのやあんめかみほにこそ月のみこそにほへ

そもふき

古雑下 なよ竹のよなかき上にはつ霜のおきゐて物を思ふころかな

同恋四 君こすハねやへもいらしこ紫わかもとゆひに霜ハおくとも

末考 山陰にあまてる月の秋なきやまのさけてのまする

万十 人丸集 さをしかのつまよふ山のをかへなる早田ハからし霜ハふるとも

末考 うちてあらかしの上もよ露のこゝろとけるゆふ世さもふるらん

未考 / 後雑二 出風集 / 後先 読人不知 / 万十 作者不詳 / 古恋三 躬恒 躬恒集 / 伊勢集 / 万七 / 同十

末は露もまかゝくれなくふりそへて宮の紅葉にたまきはるらん

さしはさまれる袖とは見えすふりつもる今朝しもさきて付なきん

たまくせ

ほるかる梅か枝にそうけて鴨の羽の霜は置らん

ひとくめ

雨雪みたれかゝる世はかへりて水雪のなかに消かへり

消はかぬ雪ふる夜の空をわけ出しとはいつまて冬は峯や

更しての雪の上のあとの跡もなしかとはれはとはまし

雪

山のはにこともみえ一昨日も昨日もけふも雪はふりつゝ

足曳の山路もしらす白樫の枝もとをゝに雪のふれゝは

未考 / 貫之集 / 後撰 読人不知 / 万十 / 伊勢物語 業平 / 未考 / 万八 / 同 / 同 / 未考

山たかみかくれなき白雪飛ちりふるらしとさえまさるらん

松乃葉にかゝれる雪ハありし山の木のはにまさりける

降雪ハ枝にしはしもとまらなん花も紅葉も絶てなきまは

よをさむみあさとをひらき出てみれハ庭もはたらにみ雪ふりたり

時しらぬ山はふしのねいつとてかかのこまたらに雪のふるらん

大空にみつる白雪のおほよそにあまきるかをも我くもるらん

梅の花ふりかくせる雪のつゝみもち君にみせんととれはきえつゝ

あまきらし雪もふらぬかいちしろくこのいつしはにふらまくをみん

大口のまかみの原に降雪ハいたくなふりそ家もあらなくに

降つもれるあはゆき紙ぬれと雪とふるらん

人丸

白氏三 人丸集　あくるよのほかに白雪とつもりなむ我まつ人はまたもきぬかも

赤人　白山にふる白雪はこぞのうへにことしもつもる雪ぞふりける

同　空みえんはあらし吹く白雪は消えてあとなくうつろひにけり

古今　雪のうちにふるさとの雪は消えずとも君が心のうちはとけなむ

後撰 読人不知　白雪はふかく降るらし都にて花ぞちりける

古今 是則　よるはしもやかぜふきて我宿の庭白妙にふりしける白雪

後撰 読人不知　冬ごもり思ひかけぬを木のまより花とみるまで雪ぞふりける

貫之集　梅がえにふりかゝる雪は春ちかみふりつもる花と見るまでふれる

同　白妙に雪のふりしくまがきには松原まもるみちもなかりけり

同　さえわたる雪はふりつゝとまらずとも上にかゝれる秋かせ

同　花とみる雪はいまぞふりしくは春とくなる年の暮かな

同　春霞たつをまつまの花とみる白雪のふるけはひ春の花をなに

同　木ごとに花ぞさきにける雪ふればいづれを梅とわきてをらまし

同　梅がえのさくらともみぬ雪なれば花も見にくる人もあるらむ

同　君まさぬ宿に残りて吉野の山のさくら雪はふりつゝ

後撰 読人不知　くれなゐに色かはりゆく山の雪はいまなほ消えぬ

古今 忠岑　白雪の消えてつもれる山里は住む人さへや思ひ消ゆらむ

赤人　かきくらし降る白雪の下消えに消えて物思ふころにもあるかな

同　下消えの雪まにもえしいささめの春の心にしみにけるかな

古今 忠岑　みよしのゝ山の白雪ふみわけて入りにし人のおとづれもせぬ

赤人　我やどのふるは梅の花かと見るまでに君がしるしの雪ぞふりける

同　何となく神の白雪ふるさとに消えてわかれぬ人ぞ恋しき

古雑下 業平 伊勢物一
忘ては夢かとそ思ふおもひきや雪ふみ分て君をみんとハ

古冬 篁
花の色ハ雪にましりてみえすともかをたにゝほへ人のしるへく

同 興風
浦ちかくふりくる雪ハ白浪の末の松山こすかとそみる

同 秋岑
白雪のところもわかすふりしけハ岩ほにもさく花とこそみれ

万二十
左大臣橘諸兄
たか山乃岩ほにおふるすかの根の白妙にふりおける雪

同十
雪をゝきて梅の花をハこひそあしひきの山かたつきて家ゐせる君

同八
梅か花枝にかちるとみるまてに風にみたれて雪そふりくる

未考
かきくらしふる白雪の下きえにきえて物おもふころにもあるかな

伊勢物 業平
おもへとも身をしわけねハめかれせぬ雪のつもるそ我心なる

後恋四 義孝殿中納言
しぬ人も松の緑にかはらねは白雪の上にあらはれにけり

未考
岩かとの松の梢に降雪ハいくかへりかも後まてもみん

同
ぬれもおしいさてゆかん白雪はあゆみかたけの松の下道

古冬 貫之
雪ふれハ冬こもりせる草も木も春にしられぬ花そさきける

貫之集
降雪や花と咲てそたのめけんなきものゆへにかれてみゆる

古冬 躬恒
雪ふりて人もかよはぬ道なれやあとはかもなく思ひきゆらん

同 深養父
冬なから空より花のちりくるハ雲のあなたハ春にやあるらん

同 是則
朝ほらけ有明の月とみるまてによしのゝ里にふれる白雪

同 読人不知
けぬかうへに又もふりしけ春霞たちなはみ雪まれにこそみめ

後冬 読人不知
松の葉にかゝれる雪のそれをこそ冬の花とはいふへかりけれ

同 同
ふりそめて友まつ雪をみる時そ我黒かみのかはる心しらるゝ

古冬 貫之
梅の香のふりおける雪にまかひせハたれかことゝわきておらまし

同 友則
雪ふれば木ごとに花ぞ咲にける いづれを梅とわきて折まし

同 読人不知
夕されば衣手さむしみよしのゝ よしのゝ山にみ雪ふるらし

同 躬恒
きえはつる時しなければ越路なる 白山の名は雪にぞありける

万八 赤人
我せこに見せんと思ひし梅花 それとも見えず雪のふれゝば

後撰 読人不知
ふゆされはときはかぬ松がえにかゝる雪をぞ花とこそ見れ

万十
夕されば衣手さむし高松の 山の木ごとに雪ぞふりたる

同
我せこと二人見ませばいくばくか このふる雪のうれしからまし

同
足曳の山まも見えず我宿に み雪ふりしき庭もおほゝ

同
ふる雪のまゝおもひに白雪の ふりにし後はおほゝ

後撰 読人不知
霜の上にふる白雪の あとの花とぞ見れ

同 是則
かつきえて空にみだるゝあは雪は 物思ふ人の心なるべし

同 読人不知
あらたまの年をわたりてあるが上に ふりつむ雪のたえぬ白山

同 同
心あてに見ばこそわかめ白雪の いづれか花のちるにたがへる

同 同
ふりそめて雪よりさきに我宿の こゝろを物てらふ人ぞまたす

同 同
山たかくふりつもりける吉野の みゆきやとけんにしばしこそあらめ

古今 読人不知
降雪はかつぞけぬらしあしひきの 山のたぎつ瀬音まさるなり

同雑上 同
霜の上にふる白雪の あさ氷かさなるらん我心かな

家持集
月夜よし花とぞ見ゆるみ雪の まだきにつもる雪の上にも

万十
あは雪はけさはなふりそ白妙の 袖まきほさん人もあらなくに

同
梅のはなこれと折らん ふる雪に色まがひたる

同
あは雪にけさはふりそへ白妙の 袖まきほさん人もあらなくに

同
同
同
同
夫木
後撰 読人不知
家持集
万十
同
同二十

ゐちもし人まちかくる鐘の音のふかくる霜夜もあらくおもかけ
秋せこらあさらくことをゆきはまつとひし霜ふかみそ
梅の紀ちるをみれは雪のいちしろくまさらんや
あまのはらの野の霜のおきてらし霜のおきてらし
ゝ月の夜はさやけく見えて白く見えける

あられ

かきくらしあられふりしけ白玉をしける庭とも人のみるへく
あられふるむと冬のあしたはかならぬもありて
秋袖よあまのときそすてあらんまたしき
あしひきの板屋吹風を秋ふかく秋つかん
霰ふる河辺にやまふかくあらしはまねきも

夫木
後撰上 友則
友則集
古今三 大輔
後撰 読人不知
同
同
夫木
拾遺
古今三 躬恒
後撰 読人不知
拾遺
後撰 読人不知
夫木
黒之集

こほり

かつては寒はかてことあそみるとうすこほりを雪
冬の雨にあやなくきゆる春風や池の氷をとくらん
古河の上をあまする我なかや下になかれて見えわたるらん
さやかにも今はともかく滝つせの流音は絶ぬる
天河冬は雪まてとけすへやいつもにほの音そよぬ
風さやく冬の雨にかゝるも流くれわたらん物やいあらぬ
冬の池にすむ鳥のあけなく流れてはやく水の下にも秋はかよへる
なかなか冬は水に綴ぬるあらん日は月もやらなん
涙川なくなくの瀬はあれと水こほれはかくしてこそ
朝日かけさしにけれ板間にてみえし氷とけなん

夫木
万三
未考
夫木
古恋一 読人不知
万十一 人丸集
同九
未考 物名派
松葉家持集

火

よとゝもにまくらの山のゆふけふり[illegible]
見わたせはあかしの浦にともす火のほにそいてぬる妹にこふらく
[illegible]の風[illegible]煙のよそに[illegible]
人をとふ心のかきりハ身をこそやく煙立とハみえぬ[illegible]
みくさまを[illegible]の[illegible]
夏なれは宿にふすふるかやり火のいつまてわか身下もえをせん
足曳の山田もるおのかおくかひの下こかれのみわかこひをらん
いさりするあまのともせるいさり火のほにかいてなんわか下おもひを
もしほやくあまのとまやの[illegible]の浦[illegible]火や
かゝりにもかけ[illegible]て煙のよそに[illegible]

後別 貫之 貫之集
後恋一 伊勢
古恋四 読人不知 伊勢物 業平
貫之集
未考
古雑体 紀乳母
後恋二 同
貫之集
伊勢集
同
万七

わかれてはうらみて焼火の[illegible]
人しれすたえぬおもひの[illegible]
今[illegible]
伊勢のあまの塩焼煙風をいたみおもはぬかたにたなひきにけり
いつとても[illegible]やまのあま[illegible]
はるゝ夜の煙をたてゝ[illegible]雲と成ける
ふしのねのならぬおもひにもえはもえ神たにけたぬむなし煙を
かきりなき[illegible]煙ハ
住江の松の煙ハよとゝもに波のなかにそかよふへらなる
[illegible]ハミ乃山にもなかめ[illegible]煙さえねハ
神のますことかさ[illegible]
しかの海人の塩やく煙風をいたみたちはのほらす山にたなひく

ちり

古雑下 読人不知　風のうへにありかさためぬちりの身はゆくゑもしらす成ぬへく

素性　え払ふける塵のかとみえしも紙埋もるそのあやし

同　たちよりて山と成てもあれとうくてある空からのかけ

古恋三 伊勢　我まへは床の塵もはらはすてありなんとはあれてくれたまへん

同　志てとはへは枕ちりをもてねし物を塵すゑぬ床の空ならん

なるかみ

万三 人丸　おほきみは神にしませは天雲のいかつちのうへにいほりせるかも

同九　あま雲にちかくひかりてなる神のみれはかしこしみねはかなしも

古恋四 読人不知　あまの原ふみとゝろかし鳴神も思ふ中をはさくるものかは

後恋六 読人不知　ちはやふる神もあらはれ中の雲井へるふみくまはるる

素性　天の原鳴神はふみならん今日は身もしる雨にこそあれ

同　なるかみて道にちるくて天津風神も空にわたりて

万十一　あま雲のやへ雲かくれなる神の音にのみやはきゝわたりなん

古恋一　あふことは雲ゐはるかになる神の音にきゝつゝ恋やわたらん

万七　あま雲のちかく光て鳴神のみれはおそれ見ねは忘れて

素性　人の心は空なれ神なれや雲ゐのよそにも成まさる哉

いかつち

古恋一 読人不知　かれ田乃かはとてふつまのはなのまにも君そ忘れき

素性　いなつまのはなれまもなく道ゆくとは父のことまれ

同　絶えて心あやなくいなつまのよその光をかけるゝ道なる

同　いなつまのひかりのまにもあふ道秋のよのいつゝん知るまいも

未考
夫木集
同
後雑四 読人不知
古今恋 読人不知
未考

こゝろある神とやいはん稲妻の雄花のうへをそらにてらさん
河上に生る柳を植てはつせのとけき秋はあらんとそおもふ
白川
羽衣をたちてはいねいは手つゝ拂ひて雨に通てやかへるらん
かけ道よ
世中とおもひしかけ路のあるなしの世をすてたをけ道
かけ道のとまりあるらん春雨乃ふるとも小袖をはぬらす
かあらぬ君やまそこにおもひしむ人よりあるなはかなしく
かけ路の乃ひあるやあやしくも見とゝぬ妹なる
かあ路のそらあなたの道くさのあまくさ
あるとみくらのこそや紀の路の道のいつまてもあら
かけ路のはかのめくかけしも見てよりつれもさそぬ

右未考

涙出て我が目ふかきにかけしみのかきくしぬれて人の心
てみとれ此まゝとて道ぬる路もはかなりやそ紀
君か心

古今和歌六帖第二

山

やま　山どり　しか　さる
ふもと　くま　むさゝび　山川
山田　山ざと　山の井　山びこ
いはほ　峯　そま　たに
なみえ　ところがま　せ絶　原
をか　とほ山　みち　こら
はやしに　むまや

田

春の田　夏の田　秋の田　冬の田

かつほ　いかな宿　みかは
野
春乃野　夏乃野　秋乃野　冬乃野
はるの野　かすみ　さすら　もろ
大鷹　小鷹　また　はし
すはう　大鷹狩　小鷹狩　野遊
みゆき　都
みやこ　都方　ふる地
田舎
くに　東方　浜　あるき

宿と　やどり　旅寐
家　家　とまり　井　海辺
庭　みとり　かど　垣
ちうま　どこ　林
人
なまめ　なんか　おや　さかれ
きいこ　くるま　うし　むら
佛堂
寺　かね　かり　あま

万七
同

山

[illegible]

人麿

同作者未詳

[illegible]

ひとまろ

同十
同七

[illegible]

人麿

同

[illegible]

万三

[illegible]

万七 作者未詳
伊勢物語 業平
玉葉 怡不知人 寛出
夫木
後撰 夫木集
万三
廿一帖 已出
家
古雑体

催馬楽律歌

如本 我せこをならの山のかひまて見つゝをゆきてまさるふ
大伴郎女

石河郎女

我せこを我松原よ見わたせは[illegible]春また[illegible]の石[illegible]

もろかつら[illegible]の[illegible]もゆる[illegible]人の[illegible]

わかしまするは[illegible]とも我[illegible]

大原や小塩の山の小松原[illegible]の[illegible]

ゆきのとし

今朝の[illegible]山[illegible]雲の[illegible]

忠岑

[illegible]代[illegible]山[illegible]原[illegible]

万十
古今 夫木 新
家持集
万七
同十 人丸集
後雑上 読人不知
同 読人不知

三吉野乃よしの山を百とせ乃雪の[illegible]

菅原や伏見乃暮に見渡せは霞にまかふ小初瀬の山

白山に雪ふりぬれは跡絶て今は越路に人もかよはす

[illegible]やみ[illegible]神山霧[illegible]

東路のさやの中山なかなかに何しか人を思ひそめけん

[illegible]やくあの[illegible]山[illegible]千代[illegible]

[illegible]女

雲[illegible]山[illegible]の[illegible]

読人しらす

[illegible]の[illegible]山霧[illegible]

大田乃[illegible]の[illegible]山峯のあ[illegible]雪[illegible]

古秋下　万七　同十　未考　同　古雑下 読人不知 伊勢物語 才二帖 雑歌已出　万七　万三　未考

飛鳥川紅葉ながる葛城の山の木の葉は今そ時雨ふるらし

ふるさとは吉野の山しちかければ一日もみ雪ふらぬ日はなし

いつしかと時雨の雨は[illegible]

世をうしと[illegible]

武士の[illegible]
[illegible]

風ふけば沖つ白浪たつた山よはにや君がひとりこゆらん

いにしへの事はしらぬを我見ても久しく成ぬあまのかご山
[illegible]

[illegible]

[illegible]

万三　同十　同 才一帖 滴已出　未考　古別 躬恒　伊勢物語 業平　未考　万十一　伊勢集　未考

[illegible]

[illegible]

うば玉の黒髪山をあさこえて木の下露にぬれにけるかも

夏衣[illegible]
[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

未考
津の国の[illegible]山乃峰にあるらけと今もとはふかとも
人まろ

万九 作者未詳
まきむくの[illegible]山を越てくるかなの[illegible]やとかしさ

未考
世中をなけきかくる身の[illegible]山[illegible]

同
思ひ寄りてゆらかしなれは津山[illegible]

同
いにしへにありてふ[illegible]たま津島

同
小倉山峯たちならしなく鹿の[illegible]

家一 古恋五
三輪乃山いかにまちみん年ふともたつぬる人もあらしと思へは
いせ

古恋一 元方
音羽山音にきゝつゝあふ坂の関のこなたに年をふるかな
津らゆき

万四
後瀬山後もあはんと思ふこそしぬへき物を今日まてもあれ

家集 後秋下
鏡山やまかきくもりしくるれと紅葉は猶も照まさりける
素性

万七
大葉山霞たなひきさ夜風吹てわか舟はてん泊しらすも

未考
くらふ山乃霞にあらねとも[illegible]

後恋四 平中興女
[illegible]のくら瀬の山[illegible]人をまとはす

古雑下
我宿は都のたつみしかそすむ世をうち山と人はいふなり
きせん法師

未考
みちのくのあふくま川のあなたにや人わすれすの山はさかしき

同
[illegible]河もひとりや[illegible]

同
春きぬと今は[illegible]

いはこふれおもひしふかき山君か心のはれゆくもかけ

き一秘

むかし見しそてまてはるかにゆくこゝろよりくれかへるものゝふ

けふあまたにあるのゝこれやこのしけき人のよそはらん

世のうしと思ひやまてもあらぬ山路をわけてかくれなき道

恨てもまつはさてまつはかりの浦の海のあまのをりたちしやるとも

九秘

いはゝしをこえてはしる乃跡のかよひ路しらぬ乃なき山の雪ゆきのふかき

豊之尊日向國の耶川乃之尊毛日本地大和言葉勤弓琴川坂あり

衣手は旅のたもとはかはかなる信の山の君かまたく

信山見顯とふ信常にあり池初乙

雨ふる夜もいねかての笠をきてやはりこむかも

むかし人のなけ今はこの道ふく風のふけはすみ

さかりなき紀の国に見る柄乃山は山賀やましと思ひ

あさくら山雲もこゆと思ふともかれ板ふみけるかなかりし

いそのかみ山桜村立ちて人のまたれしそらにくもゐのまゝ

旅ならは雨のあしてふまてとゝまる山の煙たえすやとてもするなれ

千早振神の御かき山のたかねにかよふ雲のまよひもとまらす

雨さへ八三笠の山の木のもとに治め席のなきかくれ家

拾遺恋四流乃あひのたゝいつのたひのはしをきみにかへり

波乃あの田のしほのゆくへのひゝきとて波はゆきかへりけん

後人云々

金葉雑上れいおもふ乃ゆくちとゆくきはやもとなくよそふなれ

人心あらしの山ふくかせに嵐のたつなき

波はしとて又はなかくれは我やまつこの成てゆくへを

いつら素性集

ちる花のなかやさきに見え

よそ人は心もしらす君こそはかの

我とのいまをは山の木の葉よりもまた我

万三雑出たゆる信乃我れ八雲

山上億良

いゆおろ乃

あかねさすたつか山を山の井のあさくらからはなるかそれ

貫之集

後撰秋下　友則

家

未考

巳上五首
並未考

古雑上
伊勢物語

未考

新後拾秋下　貫之
又貫之集に[illegible]

なくてのみ[illegible]旅まくら[illegible]
かくはかり[illegible]夏の[illegible]山[illegible]
[illegible]
[illegible]山[illegible]
[illegible]山おろし[illegible]風の[illegible]
[illegible]秋風の吹[illegible]空の[illegible]
[illegible]山を越[illegible]
なをとり

大原やをしほの山もけふこそは神代のことも思ひいつらめ

姨[illegible]の月[illegible]清[illegible]てる
きみ[illegible]

古秋下

家
後秋下

万八
月三　拾水考
言之

同三

万五　家集　千載

万十一　作者未詳
人丸集

未考

秋之　仙宣

[illegible]ときはの山は吹風乃音にや秋を聞わたるらん
山[illegible]

惜[illegible]山は旅まくら[illegible]
見[illegible]

白露[illegible]

雨ふれは[illegible]山人[illegible]
山とり

人ま純

新古恋五
拾恋之　人丸
読人不知

雲[illegible]
あ[illegible]乃[illegible]

旅風の[illegible]山[illegible]の[illegible]

赤人

夕されハ君きまさむと乃山にはなく鹿のこゑさらなん

古春下

花ちるをやかてもみちは霞立山の山ふきの
荻原乃渡霞

赤人

猿

足曳の山の猿丸にはまかみをとこならなくに
凡河内躬恒

古雑体 家

わか乃きに海ならぬ鳴く鹿のこゑのあかすやなくらむ

同

心あるをとこもよし鳴く鹿のよるもよすからなきあかすらん
赤人

万八又九

夕清道にはしかはきに鳴く鹿乃よはになりてはなをも
人まち

万四 家持 下云々

夏野ゆくをしかの角のつかのまもいもか心をわすれておもへや
新古恋五 人丸
妹か心を忘れておもへや 万

家持集

鳴鹿乃妻こふるまの山のはの秋はきのうへにつゆそおきける

古今雑体 読人不知

いかにしてしはしわすれんいのちたに秋はきやまの鹿のこゑをも
秋来れは

万十一

たつ山乃尾上の鹿乃友よふる声をききつつゆかむ
万十七

同十

小男鹿の妻よふ山に鳴く鹿のこゑにかなしき秋の萩原

赤人

朝乃あさ道にたて鳴く鹿乃立別ゆかはまたやしらまし
いせ

伊勢集不載 古今雑体 紀淑望

秋山にはなるる鹿乃年をへてなそや心のかひよとそ鳴く
さらに

古雑体

まれ此鹿乃こゑをさそふ妻ゆゑにいよよまさりておもひかねつつ
とひくるとせなこそわくらはに
さも猿

万十

はたの猿乃秋乃あさけに霧かくれ妻よふ鹿乃音のさやけさ

ことよひ里

家 後撰秋下 読人不知

されはまけと許る[illegible]にかくし秋に鳴[illegible]なん

古今

めくりあひ[illegible]の影[illegible]に[illegible]鹿の鳴[illegible]る

家

婦鹿そ流[illegible]鹿の[illegible]野の花[illegible]
貫之

同

心しもなかりし[illegible]鹿乃声[illegible]きけは[illegible]秋[illegible]

家 玉 秋上 読人不知

[illegible]人[illegible]萩[illegible]小男鹿の鳴[illegible]
人麿

家 万十 作者未詳

足曳の山の[illegible]に[illegible]鳴[illegible]小牡鹿乃[illegible]
万 秋上 [illegible] 伊勢物語 [illegible] 万下同

万八

[illegible]秋[illegible]かけて鳴鹿乃聲[illegible]やみ[illegible]なるらん

古今

秋萩[illegible]鹿乃聲[illegible]

同

[illegible]鹿乃[illegible]

万十六

[illegible]鹿乃声[illegible]

古今 秋萩 読人不知

[illegible]小牡鹿[illegible]

同

くまの

万十一

[illegible]鹿乃[illegible]山の[illegible]

万六

[illegible]山[illegible]
志貴皇子

むさしのはたもとをさしてたつ宮乃山路にかゝるあふみかるかる

山川

山川乃瀧津心をせきかねて人乃きくのみなけきつるかな

おとにのみきゝしも山川の人も心してやまさりけり

山河乃しほのはやくもよにふるはなかれてとまるおとやかなしき

さゝなみやみやこのおくにしら山川の浪をもしけみまさるらん

あまさかるひなのなかちの山川のたきつせのおとをきくや

山田

おとはやまつゆくもせる妹とわか山河乃きしのゝへにたちてたつねし

足引乃山田作子ひてすとも縄たにはへよもるとしるかね

あしひきの山田をよそにみることもなき世乃縄田かるまてもあはしとそ思ふ

あらてをさむるよしもかな山田乃苗代水のみなくちまつる

かはつなく山田の沢のあさき瀬にしらぬ人やはまたもかよはん

山田さへ今はつくるを散る花乃かことは風におほせさらなん

みつね

かせにてゆく山田乃いほのかりそめのおもひはつゆの身をしてあるへき

遠山田のたつやひとめも見えねはかりはてしものをうきにやあらん

もとかれ

山田にもみつまきかけてかけ時のかりほのやとにあはれつく

山かけのくる山田乃あきかせにさむくなれははかなくなりゆく

白露乃おきてし山田かりましを世乃なかきよをおもふなるかな

山里

赤人
山たかみ[illegible]梅乃[illegible]人にも[illegible]

貫之集
やまふかみ宿かりて[illegible]心[illegible]

古今春上 伊勢
春くれと花も白[illegible]

貫之集
ゆきやらぬ[illegible]

同
雪の[illegible]山里は[illegible]

同
[illegible]山里に[illegible]花は咲[illegible]

古今 秋上 忠岑 忠岑集
山里は秋こそことにわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ

後撰 読人不知
山里に[illegible]

古今 家持 家持集
[illegible]山里に[illegible]

後撰雑一 伊勢
[illegible]山里に[illegible]

山乃井

古今序
あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

古今 離別 貫之
むすぶ手のしづくに濁る山の井のあかでも人に別れぬるかな

貫之集
くやしくぞ汲みそめてける浅ければ袖のみぬるゝ山の井の水

赤人
いまさらに[illegible]山の井の[illegible]

興風集不載
浅からん[illegible]山乃井の水

後雑一 読人不知 興風集不載
たきとの
[illegible]山乃井[illegible]

山びこ

山ひこハ我身乃外乃ものなれやなげくといへどこたへぬ

津れもなき人をこふとて山ひこの答するまて歎つるかな

山ひこ乃答のまにまに鳴かれはいかにせんとか思ひけん　貫之

山ひこも君にあるらしこたへぬハ我が身ひとつのなげきなりけり

世の中の山ひこ山彦ちは通はんや我のみひとり人にしられで

あふことを此山ひこのこたへなば我ハ人にもしられざらまし

打侘てよはん声に山彦の答ぬ山ハあらしとそおもふ

鶯乃鳴声聞ハ山ひこをおとろかすまでまつぞ鳴ける　いせ

やまひこの声よりさきにたつねても人こそ来ぬれ　家持

山彦乃あひとよむまて妻こふる鹿の声きけはものそかなしき

いはほをば我そたつぬる山ひこのこたへぬ山に住まんと思ひ　いせか

いかならん岩ほの中にすまはかは世乃うき事のきこえこさらん

みよし野の岩きりとほし行水の音にはたてし恋ハしぬとも

あまのはら岩戸の岩ほ打とけてあけ行空に鳴く鳥の声

いかはかりくるしきものと岩ほをはしらぬ人こそすみよかりけれ

いはほにも生ふる松かね年をへてかはらぬ色を見るそうれしき　いせ

家
たまかつらかけける岩ほぬれて君まちつる心ある哉
[illegible]

峯

家集不載 少一作云々 古雑下
きのふまてよそにおもひし春霞たちのほりぬる峯のしら雲
ことはり(?)

作者親王
白雲のたえすたなひく峯にたに住めは住ぬる世にこそありけれ
惟喬

古秋下
秋風乃吹ぬる日より音羽山峯の梢もいろつきにけり
貫之

谷

夫木集
鳥の音もせぬ谷の埋木も人しれぬ身の類なりけり

古雑下
光なき谷には春もよそなれは咲てとく散る物思ひもなし
ふかやぶ

未考
あさら山霞乃谷にゆけは秋ちかき日の色たえて見ゆ
元海

未考
宗末はかくあれは松よりも流の中やすむらむ

未考
桜咲かた山の谷のやまおろしに花ちりかへるあまの衣

万七 同上
志賀の浦やたちくる浪にまかせてや君かめくみのたえす有らん

未考
宗末は浮世にかなし谷のうへの雲乃やまさへふかくもあるらん

古雑下 家
おのか名は松の下枝にかけて世の中にあそふ我身なりけり
ある時はありのすさひにあるを松の行末をみむ身にそ有ける

未考
兼盛集
未考
同
後拾四
未考
同
同

みわたせはけさそほのかに松乃えにつきせぬ色をはなにみる哉 雑六
すゝか海

谷ふかく梅咲海乃へにふかれてなかれぬ身にもあふ

とほき木の花とゝか海よりまよへる舟のたえまにもみゆ

なかめつゝすゝかまた我人のとふもかくも知らぬ空

人めなみぬれ山への雲をとゝすゝか海の煙といはん
せき

海とれなきた

八雲たつ此うちの空にてまつらせはうたちまゝきりて

まてしはしふりかゝりけむやはりせのかすみてそふかく

あさきたの浦乃海をてはなきことふく山田の花

但馬集
後恋三 小条内大臣新
未考
未考
同上
未考
同不載
未考

河くら乃雲乃あら垣にまつもいて神まつる月の中しは

かくらのをり乃あけ垣にまつはしのよりしはかるゝ

志らうしかけまきものうちよりまれ月にてらさん

あまつ乃のあ海乃雲のかやすくもはなちておりはなつま
れつら

かくはそやはきの山のふるさとみてくすしきの

君かすむまさの原よりふる雪乃まへを別とも

朝日さす浅茅か原乃霧はれてあきの花ちるらむ
山乃上に花をそ

名のみしてはなをかすかにはなてつれ

あはれなりみしのこかけの花はさきぬらむ

万十

秋かせ乃日ことにふけは水くき乃岡乃木葉も色付にけり
ひとしれす

後雜二

水くきのあとはかりこそ此世をへても今の行末に残ても
みつくきのあとはかりをかたみにて岩かねにこそ結ひおかれ

兼房

師頼卿

兼房

岩代乃岩根の松やむすひ置し君か代の国のかやのあるる

陸奥乃しのふのおくのまつ山にあひ見すはとておもふ人さし
足柄乃山のふもとの白波乃立別れしとおもひ君をおもふ

兼房

同

舟岡の上に立る白雲乃立別なは衣手をかふ
あかねさすひるとしもなくかよふ君をまつらん
とはる

（家集不載）
古雜上　読人不知

大あらき乃森乃下草をいのちをかけて見ておもへ
人しれぬ思ひをつねにするかなる富士乃山こそ我身なりけれ

万不載

兼房

同

同

山城乃いはたの森の下枝をいはねともこゝろに君を恋わたるかな
いはかきのいはせの森の木の葉乃ちるを見つゝ秋のくれかな
君にのみ心をかけて夕されは森の木の下に風ふき
吹風にたなひく雲も世の中にかたみとならむ
いつもやまふかき森の木のしたつゆ
いつまて見れは世乃中乃森の木のしたかせ

万不載

兼房

同

同

万十七

兼房

山城乃石田の杜に心ありて…
妹か家にいかなる山の森なれは
やかてみたれてゆく山城乃石田の杜によるへし

未考

わすられぬ乃よそのえにしをとをらねのみそも何をかくらん

（行恋 忍同 所知上云陸奥）

後恋六 元方

千はやぶる山とよむなる神かきにいつの世乃杜のいゝともみ

未考

かはづなくいでの杜乃紫よし山懐もあらしふきとや帰るらん

同

ふるさとはいくたの杜の下かげの草葉の露にそぼちけるかな

万不載 家持集

我門乃わさ田もいまだかりあげぬにかゝあけの紅葉なれそめてはらふ神のいへ乃ねぎらがゆふしで

（忌部首 室麿）

家

神な月時雨をいとふ紅葉は錦にまとふ神なびのもり

貫之

（堕女子 家持集）

後雑二 家

人ならばとはましものをなにしあまたの森の下なる草よみともみはるゝ君もこそすれ

後雑二 家

大あらき乃杜の草とやなりにけんかりにだにきてとふ人のなき

（たゞ後 七 万八 家）

古雑俳 読人不知

いそのかみふりにし恋の神さびてたゝるに我はいねぞかねつる

（拾恋四 忠房 いそのかみふるのやしろのこひしきは 古秋同）

杜

万十一 伊勢物語

ちはやぶる神のいがきも越ぬべし今は我名の惜けくもなし

（名 多くも 万十一）

古雑上 読人不知 伊勢物語 業平

我見ても久しく成ぬ住吉の岸の姫松いくよへぬらん

よゝへして

古恋一

ちはやぶるかもの社のゆふだすき一日も君をかけぬ日はなし

やらまし

家集不載 万十三 作者未詳

天地乃神を祈りて我こふる君かならずあはざらめやも

同

いにしへ乃神の時よりあひけらし今の心もとこわすれずと

（流拾万）

古秋下 読人不知

千早振神なび山乃紅葉ばに思ひはかけじうつろふ物を

古今 秋
家
拾五 恪撰 家也
万十作 有本集
同三
未考
柴四首 貫之集
家

まだしらぬあすのやまどりのなくなるかなしらぬものゆゑ
人麿

拾雑秋 読人不知
いかにして夜をあかすらむ[illegible]秋の夜の月
あさましや[illegible]のあきの[illegible]ともなく[illegible]

神なびのみむろの山を秋ゆけば錦たちきる心地こそすれ
[illegible]

人しれずかかるおもひのちはやぶる神のいがきもこえぬべし

あまのはら[illegible]千早振神のいがきの[illegible]

春霞たちしは猶稲荷山[illegible]

以上四首

いなり山[illegible]人[illegible]
忠家 貫之集

清少納言 大鏡
かまくらのおやまもとのなかなるきよし[illegible]
あふさかの神のいがきもこえぬべし
貫之

かはら
くれなゐの[illegible]ちりのまがひに[illegible]
一[illegible]なる神のいがきもあまのすむ[illegible]
[illegible]
かつらぎやかねのみたけのしら雪[illegible]
[illegible]山のたかねのあさぎりに[illegible]
たつたひめかざすの[illegible]

家

素性

家

古今五 遍昭
遍昭集
素之集

素性

素性

同

わかやとのはなふみちらすとりうたむ野はなけれはやこゝにしもくる
みはなれ

むかしおもふ乃はなもにほふと宿もかはらぬを
はるゆき

夏山乃かけをしけみやたまほこの道ゆく人もたちとまるらん

けふのやといふ名をもちなからあきはきてむかしの人のまつをなつかしく
[古今二 素之 / 天之人遍昭集]

むかしおもふ袖のみにほふ人にゆきてあらましかはまた見えぬかな
[毛詩抄 / 素之集 与今同 / ときの乃まま]

たまほこの道ゆく人も見えぬかなしけきはやまにのひしきつゝ
[ねには抄]

ほとゝきす

心ありて見むとしもなしはなの色をやかてうつろふものにやあるらむ
[ちえ]

人しれすなけくてかなしむつまをはやみてもわすれぬ

わきもこやいつしか沖の使なのえ思ひけむ
[万に鉾を梓に作く依之梓にあたり准之う知 / つさ / つさ]

家人をいつしかと沖の使見えつとおもふらん

非かしはそらにいへは君か使にまつらむ
[え万]

我恋乃ゆるしかたきをしるせはや君か使をまちわひそなん

わか恋を人にしられて君か使もなけき渡らむ
[家持集]

むかしや
[かやくへ]

東路乃さやかにもかへてあはれとみる人の心をしるよしもかな

あつましの道乃遠さをあはれとおもひやるかなそ君を待つ

まつかくれ
[松窓之読人不知 / かろき山見松]

来ぬ人をまつほの浦の夕なきにやくやもしほの身もこかれつゝ

素性

同

万十一

同

同

家持集

素性

同

後撰一
読人不知

古恋五 読人不知

わか門田をおしわかくしてもみくしてやかましき人の心をそはかなき

家

いつしかとなけきこしまの田乃かはつも人にこゝろをつくし紀

同

春の田を人にまかせてわれはたゝ花に心をつくるころかな

同

あしひきの山乃桜の花をみてそ春の田にうゑはしめける

以上二首

貫之集

おもひきてたれかつましき田乃かけの今はなしけん

夏乃田

家 万九

ますらをのこゝろはからも山田をかへしておりたちて植る田のなへ

家

はるかなるなはしろ水のあさみとりおきなかに雨もふる

秋乃田

貫之集

秋の田乃かりにくる雁の声ならて雲かくれ帰る鳥乃かけにそ行へ

万八

旅乃田のかりほのいほにしくれふりいなおほせ鳥のなきわたるらん

古恋一 読人不知

秋乃田の穂のうへをてらすいなつまの光の間にも我やわすれん

万二

ほのかにてとふへきものをと旅乃田の穂むけのよれるかたよりに

古恋二 家集不載

こつね

家集不見

人心今は秋田の穂に出てしのふるかたに

万十

旅乃田のかりほのいほに守る人乃ねたくもなきてのみそへ

わせせい

古秋上 読人不知
我門乃早田をかる[illegible]にも鳴なへにけさ吹風にかりはきにけり

万二 但馬皇女
穐田乃穂向乃よれるかたよりに君によりなゝこちたかりとも

谷田

後秋上 読人不知
秋果て[illegible]

未考
心もておふる山田乃ひつちほは君まもらねとかる人もなし

かゝり

万十 人麻呂集
秋田かるかりほをつくりわかをれは衣手さむく露そ置ける

とはれ

家
見しゝ山田乃おもて乃いねを[illegible]まもる[illegible]

貫之

家
か[illegible]て[illegible]風に[illegible]

万十
妹もるかりほつくりて庵してあるらん君を見るよしもかな

同
たつかねのきこゆる田居に庵して我旅なりと妹につけこそ

後秋中
秋乃田のかりほ乃庵のとまをあらみわか衣手は露にぬれつゝ

天智天皇

いなをかりてとも

[illegible]

古秋下 忠岑
山田もる秋乃かりほにおく露はいなおほせ鳥の涙なりけり

人まろ

古秋上 読人不知 家集不載
我やとにいなおほせ鳥乃なくなへにけさ吹風にかりはきにけり

そかゝ津

未考
そか[illegible]山田乃[illegible]

未詳
旅乃[illegible]よ[illegible]君[illegible]袖乃[illegible]

同
足曳乃山田[illegible]

春乃野

未詳
[illegible]よみ[illegible]雨[illegible]

家
読人不知

[illegible]春乃野[illegible]

万十二
[illegible]

古春下貫之
春乃野よわかなつまんとこしものを[illegible]花の数[illegible]

未詳
[illegible]時[illegible]

夏乃野

人丸

万四家上庶已出
夏野[illegible]

旅乃野

白氏二貫之
旅乃[illegible]花[illegible]

是之集
旅乃[illegible]

冬乃野

或本書云[illegible]冬野題而無二首[illegible]

そせい

素性集不載
[illegible]

同未詳
[illegible]

万六
[illegible]

家持

百二十 春彦

百十 同十一

同十九 作者未詳

家

春彦

同

露ちる秋のよの山てらす六玉しらせるよしなくて旗の花床

卯下南おまかりしとき志賀の山こえにて女のあまたあひて

山の人々にわかれけるをりによめる

梓弓すゑのまつ山あけぬともかゝる君ゆゑにとはぬはあらし

百十九元十月廿二日於尼崎中納言家宴歌三首 右一首作新古今集所載之又遥京都 時鳥春彦作之於今集地作者未詳

夜深きまてよはにまさりて朝鷹

君やこむわれやゆかむのいさよひに

とも

貫之

音羽山木の下露にしぐれつゝ鹿の音きこゆ秋のさやけさ

おく山のまつのはしたのくれなゐに鹿の音をとめ入りし人

あかしかね山のはちかき月影をかくてやまこのまにのこさむ

よみ人しらず

百四 同十六

已下四首 并春彦

家

春彦

ほとゝきすまつよはまてやかりしる人をまたやすつらむ

あかしとや

降る雪にかくれぬ月のまつのかけ

まよふまのよるはいつとかしらさむ

大鷹

やかた尾のましろの鷹をひきすゑて君かみかりのあとをたつねむ

あつさ弓今は雲ゐにかへるへき

雁かねのなくこゑにまかせてそゆく

はなちてしとりはいつかへりてくる

小鷹

かり人のこゝろに鷹はひかれつゝ

庭鳥をなつけしまゝにのちの世に

おもへはゆめの

百余二不見人也春彦

同　かくて此[illegible]
後撰雑二 読人不知　[illegible]
夫木　[illegible]
万八 家持　年[illegible]
同十七　春されは[illegible]鶯[illegible]
同　すきものと[illegible]
同十　あさのまに[illegible]雉子[illegible]
夫木　春の野に[illegible]
同　[illegible]

夫木　くらはし山[illegible]
万四　うつら鳴ふるきさとより思へともなにそも妹にあふよしもなき　家持
古今雑下 読人不知 伊勢物語　野とならはうつらとなりて鳴をらむかりにたにやは君はこさらむ
万八　鶉鳴ふるきさとの秋萩をおもふ人とちあひみつるかも
夫木集　おかやまの[illegible]
同　[illegible]

同
冬草の枯たる果てはしらしとも[illegible]

同　六帖冬草
霜枯の草葉をうしと思へはや冬野の野へは人のかるらん

以上

古旅　伊勢物語
狩くらし織女にやとからん天の河原に我はきにけり

同　在常
ひととせにひとたひきます君まては宿かす人もあらしとそおもふ

万十九
須戸乃[illegible]秋萩花[illegible]

小鷹かり　やかもち

万葉　家集不載
[illegible]野乃小萩か原の[illegible]

貫之集
[illegible]

貫之集
花乃色[illegible]

同
百草の花[illegible]女郎花咲[illegible]

以上　貫之

貫之集不載　六帖後出
かりにとて[illegible]

野遊　そせい

家　古春下
いさけふは春の山へにましりなん暮なはなけの花のかけかは

万十
春日野の浅茅かうへに思ふとちあそふけふをは忘られめやも

同
春霞たつかすかのをゆきかへり我はあひみんいや年のはに

同
春の野にすみれつみにとこし我そ野をなつかしみひと夜ねにける

家集云天平十四年十二月[illegible]

家
[illegible]

麦万
[illegible]

赤人
同
古春下 素性
同秋上 読人不知
赤人
躬恒集
貫之集
赤人
貫之集
万十

あしひきの山さくら花日ならへてかくさきたらはいとこひめやも
野への見えはなとなくてもかれなん
いさけふは春の山へにましりなんくれなはなけの花のかけかは
百草の花乃紐とく秋のゝに思ひたはれん人なとかめそ
秋のゝをたもとにすれは花のめにまみのたえ
家人のかとゝいふなる女郎花はとしいくよをか経し
かりそめに人のかよひし女郎花乃花の名にめてゝ
紅葉ぬ見えはなれて
をみなへしさきたる野へをゆきめくり
秋風も涼しくなりぬ馬なめていさ野にゆかん萩の花見よ
山乃うへの花なり

万八
同
古秋上 読人不知
是則集
万四
同十九
同

秋乃野に咲たる花をおよひをりかきかそふれは七種の花
旋頭歌
萩か花尾花葛花なてしこの花女郎花又藤袴朝かほの花
をみなへし
吉野山ゆきとみゆらん白雪のたえまも花をやとにうつさむ
名にめてゝおれるはかりそ女郎花我おちにきと人にかたるな
梓弓はるの野にさく女郎花秋にもあらぬ色やなからん
左大臣橘卿
藤袴君か衣のうつり香にはなれぬものをいかにせん
大伴家持
秋の野の尾花かすゑを吹く風に君かまもりをたのまゝし

同九
しら崎は行幸なりとも大船にまかぢしゞぬきまたかへりみむ

同六
大君の行幸のまに/\我妹子が手枕まかず月ぞ経にける

後雑一
[illegible]

万一
[illegible]

[illegible]　読人しらず

古春下 平城帝
[illegible]

家 古春上
ふるさとゝなりにしならの都にも色はかはらず花はさきけり
ならのみかど

同旅 乙
[illegible]

[illegible]

万三
大伴乃四縄
藤浪の花はさかりになりにけりならのみやこをおもほすや君

古雑下 貞樹
[illegible]

万四
都路をとほみや妹がこのごろはうけひてぬれど夢に見えこぬ

古序
[illegible]
家集詞云七條秋乃屏風歌
伊勢

家
[illegible]
小野乃老ハ大弐之時乃歌也
大伴旅人ハ帥と可ハ誤也
大宰乃そちをのゝ老朝臣

万三
あをによしならのみやこはさく花のにほふがごとくいまさかりなり

[illegible]
葉[illegible]

古今 家集
伊勢物語
業平

同

万二十 家持

万葉 家集不載

古今 雑下
家集

家

名にしおはゞいざことゝはむ都鳥わが思ふ人はありやなしやと

めづらしく鳴をきくらむ都鳥いざ人のとふあるやとおもひて

なりひら

舟きほふ堀江乃河乃みなきはにきゐつゝ鳴は都鳥かも

もゝしき

人まろ

百敷乃大宮人今掛けはしはれぬ人にてふみてありける

伊勢

山川乃音にのみきく百敷を身をはやなからみるよしもかな

かくす

白露は北をきて左もしらぬ袂にひかりとや宿る

伊勢集 後撰 伊勢
万十三長歌 作者未詳
同六長歌之
同七
同十三
未考

てらしみえて

別るれとあひもおしまぬ百敷をみさらんことや何かかなしき

伊勢集後撰大和物語に...

百敷乃大宮人は何かはれと月日もてあそひける

人麿

もゝしきの大宮人乃まかり出てあそぶこよひの月のさやけさ

天地とひさしきまてに万代につかへまつらん

中納言やかもち

山城乃木幡乃森に馬はあれと歩よりそ我くる汝をおもひかね

人まろ

敷嶋の大和乃国に人ふたりありとしおもはゝ何かなけかん

かゝらんや...花を波をよする

夫木
万四
同
同
同三
催馬楽

はるのゝ若のの八重山ふきのはなちるをよにたくひなくあはれとそみる
恋せんとなれるみかはの八はしのくもてに物をおもふころかな
遠江いなさほそえのみをつくしわれをたのめてあさましものを
ららにきてくれはけふそこえける山のはにちりてかゝれるつゆのしら玉
甲斐かねをねこしにふける風のおとにかよふ白雲小菅のなみの
むさしのゝ草はもろむきかもかくもきみかまにまにわれはよりにし
ちさらなるあまのまさこの浦の玉をこそひろはんとてもたえすきにけれ
近江の海夕浪千鳥なかなけは心もしのにいにしへおもほゆ
はゆるり
しほあめ
乃かみのゆきのこるかたのかたみのをのみやまかみのふちなるそめのさ
またかへりて

夫木
万四
同
古今恋三
夫木
万十二
夫木廿三 倩濱 又出
古別

きさくやあまのもしほにすむいはやおもひのそてにかゝるしらなみ
あふみなるかけのかはらにこきいてゝ八十のみなとにたつかねのこゑ
かはらにすむかものこゑのきこゆなりさよもふけぬとおもひしらなん
たまつしま
いさやかはいさとこたへよわかなをはかゝつとしるなふかにとりてゐよ
いてゝゆくかはのをちかたこゝろせよふかきそことはしるやしらすや
うちわたすかはのなかれにみをなしてうきてそわたるさをのしつくに
たよりにもあらぬおもひのあやしきはこゝろをひとにつくるなりけり
但馬なるゆきのしらはまみちもなくゆふやみのよにたつねきにけり
あらためていまはとおもふみやまへのこのしたかけにまつそわひしき
人丸集

家万二
石見のやたかつの山の木のまより我ふる袖を妹見つらんや

未考
はるかなる[illegible]乃海より[illegible]海士乃釣舟うかひ遊[illegible]
之続朝

古大歌所 作者未詳
まかねふくきひの中山おひにせる細谷川の音のさやけさ

万四
周防なるいはくに山をこえん日はたむけよくせよあらしその道

同六
なくさむる[illegible]のみちよりましてわか[illegible]人ハいかにそ[illegible]

同七
まつほの浦[illegible]の浦を見んと家をいて海士乃燈[illegible]

同九
[illegible]やこのもとに清きなと渚の鶴[illegible]
人麻呂

同三
[illegible]乃かくれ[illegible]

未考
昔[illegible]

[illegible]

未考
いは[illegible]の[illegible]

君か[illegible]
新千 雑下 忠岑
後撰 恋四 読人不知
あかてけける

万十一
大原乃ふりにし里に妹をおきて我いねかねつ夢に見えこそ

古雑下 読人不知
いさこゝに我世はへなん菅原や伏見の里のあれまくもをし

同 家
いさかは此月乃かけ[illegible]みえ[illegible]のこゝみ返るなる
いせ
たかみこ

古雑下 伊勢御歌
今そ[illegible]

古雑上 読人不知

遅く出る月にもあるかな山乃端乃雲を押して出る
足引乃山のあなたもをしむへらなり

去秀

夏の夜の月はほとなくあけぬれは朝の間をそかこつへらなる
伊勢

古恋四 家

常なるもあらぬ世の中にあはれ人の心のあさくてかはりはてなん

去秀

旅乃空にかゝる心の中をいかにせん萩原や伏見の里乃秋のよの月

（同 月 新秋上出）

東路乃空なる里の秋の夜は〔秋〕のの月をあはれとやなかむ

拾恋三 読人不知

恋しさはおなしこゝろにあらすとも今夜の月を君みさらめや
新古 後光明天皇（御）同

あさからぬ契りをこそは頼みしかいはてなるらん〔さと〕
とふ人もなし

方一

都にはまた人となき〔さと〕乃は秋の夜の月

同二

我宿にてもおなし雲井の月をみて
東路乃人もこのよみなと〔此方〕
いかにこの月

同四

家人にあはてやむかしいはての雲をわたしの上にかよふ〔さと〕〔も万〕
あるらし

古春 読人不知

駒なへていさみにゆかん古郷は雪とのみこそ花はちるらめ

家

人はいさ心もしらす古里は花そ昔の香に匂ひける
貫之

家

拾春 作者

ちらぬまにまた見ん古里の花乃色をそれとしる人にあらなん
いせ

家 是則集 躬恒集

新勅春上 亭子院歌合

ま山乃峰乃白雲はいつもいつも梅乃花なかなか（にほ）ふる
おきかぜ
新勅 春集〔之〕同

後雑一

ちるとみてつもりて〔古〕里の花の雨のふるさとの（をり）にいかゝあるらん
式部卿あつみのみこ
〔ま方〕

伊勢集不載
古今雑下 読人不知
伊勢物語
三十六番 貫之集

家

未考

やど

あれにけりあはれいく世の宿なれや住けん人の音つれもせぬ　伊勢

新勅春上 貫之
とふ人もなき宿なれとくる春は八重葎にもさはらさりけり

八重葎おひしけりやとかゝりせはかくれぬ人の門鎖める

おもしろき島のありける宿なれはみな人とふらん人そおほき

菊の花おりてかさゝんなみせむ人の渡の舟もてこよ

住吉のきしにある宿とやいはん松の影も月もかくれぬやとなり

以上五首貫之

いせ

我宿はすみける人をあはれとて君は宿とはれぬ人を

伊勢集 元升にて行しやとの月（以下不明）

我やとに月ふりしきて道もなし

家集不載

貫之集

古今 読人不知

未考

古秋上

同秋下 読人不知

未考

八重葎さしてし門をいまさらに何にくやしくあけて待けん　伊勢

我宿は雪ふりしきて道もなしふみわけてとふ人しなければ

さとはあれて人はふりにし宿なれや庭もまかきも秋の野らなる　僧正遍昭

古今
霧分て行かたもしらぬ秋の野に宿とる人を

題しらず

足曳の山の奈良の中に宿もなし

読人しらず

古春下

やとりして春の山辺にねたる夜は夢の中にも花そちりける

いさこゝにわか世はへなん[illegible]

かはつなく

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同

[illegible]

伊勢

[illegible]

[illegible]

家

[illegible]

貫之

[illegible]

家

[illegible]

[illegible]

読人不知

百十一
人もなき宿と君には鶯もなくや家にあひてやかへる
人丸

同
しらぬ雨まさめかはすくるゝまでゆふべの家のあさぢ
妹かあたりはまてかへてまやまとなる松がもと家
天智天皇

同二
頃にもみえぬ物は桜花ねたくも風は吹きもするかな
いせ

後撰春下 家
逃げはこそあるといふ事も桜花のよそにちるらん

素彦
桜花しくかのこゝろとやいふあらぬ人やとふらん
伊勢集 土御門中納言 貫之

家集不載 古大政所の歌
我やとの桜の花の雲と見て人や家にもかへるらん
家持

素彦
おもひやせぬの花の人もて鳥にもさきてもあかぬく

百七
おもひ出てむかしの宿の花なれば我に問ふべき人もなき哉
読人しらず

伊勢集
わすれじの人の庭の井の水にあひてこそ忘れなるらん

百九
見つくしの花の井の緑とかよひてこそふるまし

素彦
むかしみし井のこころの庭のあさみてたのむよ
伊勢集

百七
あしひきの山の岩井のうちのあかねさす

古刹遍照
夕ぐれの春かけて見えしとてやまぬ雲
まう比

素彦
夕暮は花のさかりにふりにし人をさへこそ

古雑体
冬ながら空より花のちりくるは雲のあなたは春にやあるらん
あやふ

家

万十

同

同四

万十

同三

伊勢集

はるさき

春は梅秋は花の菊にみる香かくてちるをみるかな

春されは卯の花くたし吾越し妹か垣間はあれにけるかも

なつ山のこすゑもさわにほとゝきすなきとよむなる声のはるけさ

やかもち

うつせみの世の人われはなに事も思ひもしらてまとひ行かな

庭

しらなみのよるよるきしによせさしてしら玉ならしかゝるあし原

たちかへるなみもよせくる松かえにさかえし花をたれに見せまし

よそにのみおもひし庭にすみなれてこゝろもゆかすかけをみるかな

ゆくへしらすも

未考

同

同十一 万七

古恋三 読人不知

伊勢集不載 同恋四

古雑下 読人不知

万十一

古雑下 読人不知
（万大伴坂上家持）

未考

おのれのみやとにかくれてなつかしきかすかにのこる花をこそみる

足引の山田のそほつおのれさへわれをほしといふうれはしきこと

庭鳥のかけのたれをのあはれなるとこよの事をおもひしらせよ

あふことはかたみにのこる月影のかけてそあはれなるうたかたの

いせ

あしひきの山田の庵に世の中をうきよの人はおもひたてる

こよひみそたのめしことの山のはに月のよみちはたのみかたきを

晴てゐるくもるよしみのあしたにはあけてゆかまし

かと

三とせ

いつやとは梅の花さへちりしくに人もまちえぬ家とこそなれ

秋かせにまたれし人もきてみれはいかにあらためし露のやとかな

同十一
後恋四 藤原成国
未考
万十一
同四 又八 月人皆秋風
同十一
未考
後恋三 枇杷左臣
伊勢集 我こ
今後撰 同

足曳の山桜戸をあけおきて我まつ君を誰かとゝむる
なかめ宗

まてといひし秋の田のかりほにいほりして[illegible]
ちくさなる花乃[illegible]
すゝ山の[illegible]

[illegible]

わかやとの[illegible]
[illegible]

[illegible]
とこ
[illegible]中納言行平

未考
上山田巳出
古雑下
万十一
古恋四 読人不知
未考
同
万十二
同十

[illegible]
[illegible]
さる山ん
うき世には[illegible]
世乃中は[illegible]
亠
君やこん我やゆかんのいさよひに槙の板戸もさゝて寝にけり
風吹と人にはいひて戸はさゝしあはんと君にいひてしものを
[illegible]
[illegible]
朝戸出の君か姿をよく見すてなかき春日を恋やくらさん

古恋四
後恋三
伊勢集

古秋上
読人不知

家集不載

家

家

古恋三 素性
素性集

右乃歌比左の如く

ふる河と[illegible]庵を今更[illegible]袖やあれて宿らん　伊勢

家集ニ今
伊古後
同

あひひ
ひとりぬる
みてぬる庵[illegible]草[illegible]あれ[illegible]

素性

みてあるとこゑ[illegible]君[illegible]今も雨[illegible]

伊勢

きすまてあるかな[illegible]

[illegible]

そら明て[illegible]にも
素性集

[illegible]

[illegible]

萬十一

同七

同十一
人丸集

萬十一

古雑上 棟梁

同 読人不知

貫之

後雑一
伊勢物語

新古恋二 読人不知
こひしくは[illegible]

萬十一 とも 萬十同

新勅恋四 人丸
[illegible]

たきつ[illegible]

あらたまの[illegible]

白雪の八重ふりしけるかへる山かへる／＼もおいにけるかな

おいらくのこんとしりせは門さしてなしとこたへてあはさらましを

ふる河の[illegible]

ゆきかひ

たまさかに[illegible]

貫之

後撰 家
後撰 是之集 家撰
後撰 家撰
家
同
後雑二 家集不載
古雑上

ふりそめて友まつ雪はうはたまのわかくろかみのかはるなりけり
かねすけ乃中納言
黒かみ乃色ふりしける白雪のまちいつる友はうとくそありける
とこしてよゝのかといもしも流れてみやの友の中(?)かきり
つらゆき
いたつらにすくる月日はおもほえて花(?)の松や新芳乃かけてそかゝ
あ葉(?)の(?)もしも年に(?)のかきいむれ(?)つく芳(?)の(?)そかけ
かねすけ
たのまれぬ世乃中を歌によみつゝあつめたる方(?)へいへは
業平
とし行き
老ぬとてなとかわか身をせめきけんおいすは今日にあはましものを
あはまし

古春上
家
家集不載
戸四
古二

東三条の左大臣
鶯の笠にぬふてふ梅の花折りてかさゝん老かくるやと
貫之
かのねよと山をたにこれあらかの食(?)をまちくる人を待(?)
まだぬ
春ふあるとをちよりはいれはくて今一年の春(?)うそふる
なんか
いかとみのめ
いにしへのみんなもいてやかてえかまとつまんてわかみ[illegible]
まさしもき
ならつまるねきとろかし年に逢ひ老のつまれ[illegible]
家持

万四
万十一
同十二 作者皇澤
後雑一 族
古別 大江千古母
族
万十一

百と塔にはおもひしらぬをとまめども我ならぬ恋はまさりて　いしさいて　とむ　いとろし　以上万

はや

をとこはらの歎きに流れやかくも我もあせくらすまでに　あるさき　万下同　うさし

いつのよにかわすれむ

松高四人丸　よしらねのおやおやかげのまゆごもりいぶせくもあるか妹にあはせて　万下同　あそす

かねもけ

人の歎の心はやふるふみはさせてたゆ流とあはぬ

なかちぬの歎のまりとあひてつる心まはせまきあそぬ

貫之

なすの文は松と行くにくちゐの歎きなりそはあそ

よもぬの歎まにさま流れまる心はやなれてまぬく　五万

万十一
同十六
万四
古今
万四
古今

うらみひ　ぬ

うらかへすみのかけ流る夜は恋まるかつくおもはぬなか　ね

讀人しらず

はなのことはまとる歎とかくはむまうなけれどもあきつ

きるに花のてゆるなてや歎はふるぬるひとすらなかまけ　ね　さてし　ね　卒宿く

よみ人しらず　万下同

わなに　つらん　万

おきかふかちかなくあなるまてある歎みのまてにはほとし　本　ふなお

かつつ流てあなるみなおいて歎みかなつゐるかなは歎ふる　こに

くるま

ひろつつ歎かまら　ころくゐゆら万

恋ふ宮いち流くまとふくまうにてあまる歎や　彩動恋二

小車のかくひろいろのかまのまうさには流の方へよとよんと思て　たえせすハ　細中ね　川く

後雜二閑窓

未彦

百之

同十一

同十四

同十一

同七

未彦

[illegible]

むさし

[illegible]

ひたち

[illegible]

未彦

同

百十六

未彦

同

同

家

未彦

[illegible]

寺

[illegible]

いせ

[illegible]

かゐ

[illegible]

百四

古今雑上 兼芸法師

後撰 修善法師

家集不載

後雑二 読人不知 (素性集)

後雑 素性 素性集

未考

同

見る人もなくてちりぬる鏡にうつるかれと君をこそおもへ　（如雲安郎）

かたちこそみやまかくれのくちきなれ心は花になさはなりなむ

紅葉月時雨のあめにぬれつゝや山ちのもみちちるをしむらん

みよしのゝ花をみすてゝゆく雁のかすみにまよふ心しらなむ

いつまてかあすもわかみのおつる涙に…

あかのゆきのちるをやかなしみて…

あきはれくあしたのゆきのまに…

世にふれはうきこそまされ宿にとまるらんかて…

今更になにおひいつらむ竹の子のうきふししけき世とはしらすや

世にふれはうさこそまされみよしのゝいはのかけみちふみならしてむ あま

そむくとて雲にはのらぬものなれと世のうきことをよそにするらむ

なかめつゝあるわひしきさいはひの… さいのん

ゆふされはいとゝひかたき我袖に…なかめくるらん

古今雑下 読人不知

遍昭集

素性集

伊勢物語

未考

古今和歌六帖第三

水

な な島 にて かさ

みか う かめ いを

あれ ふる ちまき きれ

あめ たを かを かは

たし た ぬなれ ちるるた

夜川 あ緒 や林 江

いを ぬま うき きれ

みなつき うつかへ はた あら

せ うこ ほま すさみえ

万十
後恋四 源善朝臣
古恋一 読人不知
素性
同
同
素性
古春上 家持

拾恋一 読人不知
衣
足曳の山下とよみ行水の時そともなく恋わたるかな
ときともなくもこひこころかも 万
深よりもおもへん
なくも 拾
足曳の山下水の木隠て瀧津心をせきそかねつる
あしひきの山下水にかけてみよ流ても見るべく
おとにのみ山下水と成にけりちゆくて
しのひあまりてくる観も乃足曳乃山下水の常に流て
後撰恋一 読人不知
夏草の下隠通ふ絶ぬ心ある物と志るさや
家持三帝紀乃歌に亭子の帝かくしまして石乃
えんまそもいかひかねれと仍かまにきて
世にかくれまくと教えるをまつて
こゑにいゆ行水の岩清水の心をよせて人をまつなん
いせ
春霞なかるる川を節とかへて待通夜夜に袖やぬれなん

しか樋くま赤ね津色と
いつかあみなるみそ嵩む
みなる沈色遊かるうらかれ
みなの志まま尤夜千鳥
深津たさ紀いそすなわ
さ紀はくかなさみかとこまか

伊勢集 云人
後撰一 読人不知

いそ山谷の下になかれても世をしのふ人をまかせみてへてかゆる
沼のはなにさく庭のゆ草に隠れてありしもの
吉なしの山の下行水のあさましき恋ふ心あり
わか山の木葉に隠れてわかれの音のしき涙は流るゝ

未考

伊勢集

下十一

家

松のはのしくれ（於篁）

貫之

君か代にあふ坂山の岩清水木隠れてのみおもひけるかな

家 古雑体

下十四

はるかなる岩ほにおふる松の木のみとりの鳥

そせいほうし

下八

なにはの浦にみつしほの羽根しあまの山の鳥もすかまつらむ

以上伊勢集

同
第二帖山上出

紅ににほへる妹かつらにはへる萩の花のさかりにたつ袖もしみ
妹かいへにいねかてぬまにかたらひて木の葉の妹か袖はぬれつゝ
水鳥のうかふこの池の木の葉落てうきたる心わか思はなくに

よみ人しらす

下十一

同

水鳥のたちのいそきに父母にものいはすきてへてかなしき
水鳥のかもの羽の色の春山のおほつかなくも思ほゆるかも

後撰四
読人不知

未考

風ふかはをとらむつみつる水鳥のうきねのみやはゆるさゝらん

同

人ことのしけきことには水鳥の鴨のうきねをやまちかける

同

よし

未考

羽の上の霜うちはらふ人もなしをしのひとりね今朝そかなしき

後撰 読人不知
第一帖 未考

冬の池にすむにほ鳥のつれもなくそこにかよふと人にしらすな

古恋三 読人不知
池にすむ名ををし鳥の水をあさみかくるとすれとあらはれにけり

素性
ゐら鳥の川へにゆくかなしとけのうへにてさへ惜からん

同
君か名も我名もたてし難波なるみつともいふなあひきともいはし

同
白妙の浪にうかへる鷺のかけ人やみるらん

元真集
霜かれ（新古恋一 参考元真）のあしまの池の氷にとちて（ありむとも）（うきてとも）（ありとみえ）（まにとそ思へ）
貫之

家
さよふけてうきねする池のみきはの霜をはらふ

鴨

家
躬恒集
もみちはのちりしく池の浪まよりたつ（いろ）

白浪のよりくるすかのあたりまてめかれぬ人をまつそわひしき（月荘子）（け 乱）

躬恒集 不載
なきにてこゝの沖のかもめおはなつまの心をそおもふ

躬恒集
後冬 読人不知
皇風集
冬の池の鴨の上毛におく霜の消えて物思ふころにもあるかな（うはて躬）（皇風集）

素性
秋かせにさそはれわたる雁かねの羽風にみたれなくやまさらん

同
難波江のあしまかくれの鴨のこゝろや人にしられん

古恋一 読人不知
あしかものさはく入江の白波のしらすや人をかくこひんとは

万十二
あしへゆく鴨の羽音のおとにのみきゝつゝもとな恋ひやわたらん（おとのみもきゝつゝもとな）
なくこゝろおもふらん

万三
吉野なるなつみの河の川よとに鴨そなくなる山かけにして

同
大伴坂上郎女
よそにゐて恋ひつゝあらすは君か家の池にすむてふ鴨にあらましを（ら万）（とふ万）（まし万）

土佐日記
古今
万十一
同九
古今
万二十
同

いろくるなりともあやうくもかへるとなりてみえるかな　はるうみ
しまへ人の花よりもふるとも秋の鴨のうきねもなし
わきもこにこふるにやあらん沖にすむ鴨のうきねのやすけくもなし
さきたまのをさきの池に鴨そはねきるをのかをにふりおけるしもをはらふとにあらし
鳰
みかくれて下やすからぬ心はあはれなきてもかくれ
霜乃上にやとりのうき鴨乃羽風のさむきよはあるへきのよもすから
みかりのゝ河に絶ぬ君まかせつゝましからし
鳰とりのおきなかゝはゝたえぬとも君にかたらむことつきめやも
霜ふる夜はたてゝ池にすむ鳰とりのよはにかへる

同
万四
後撰春中 宮道高風
古今
万十九
同
同
古今
同

あふことはかたゝゝる鳥のうきねしてはてぬかな
みかくれて池乃心をしそ君ににしあはれなる
春乃池のたまもにあそふにほ鳥のあしのいとなき恋もするかな
独みて身をうきくさの底に綴をゑ涙おちぬる
う
やまもち
としのはにあゆしはしらはさきたかはうやつかつけてかはせたつねむ
叔羅河乃なつさひのほりひらせにはさてさしわたしはやきせにうをかつけつゝ
う川たちとらさむあゆのしかはたはわれにかきむけおもひしおもはゝ
かめ
吉河乃底にすむかめのかすしらすかなしきよもをかて
大井川かはへにすめる亀山のかめのよはひを君にあはれと

続古集
夫木
同
夫木
万四
夫木

浪の上に出るかけハ万代とかはらぬ浦の月にいりぬれり
いせ
江門に比かた乃原へ見ゆへよ出てつゝ延喜比釣舟
いせ乃海よ釣する蜑乃奥にそらすへうけともはま辺にしるかな
新古集　心をいさなき 断乃浮うけなれやうけもひかれて定めかねつる
出るれ
行乃比下なるこゝのへに杉のまた比もあらぬ浮山之人々
淀河乃庭よすまれてなとゝ見えてはるかに（ひと）
みなそ
　　　　　ちとやともの大君
　　　　　まかせてゆる道
真（奥）へ行へにゆき今や妹にあれとそいひつ（ん）人と比くなれ
人しれぬ道もなれ乃下にはかくへともおなしこゝろにいかゝ
　　下もかくれてこそなけれ
すくれ

夫木
万十一
同三
夫木
夫木
同
夫木
公任集

ちとまれるさけぬの浦比海にまてふ今こそまちてこそまし
すまに浮る延舟乃さくなみのよふみのかたへゆくよりゆる浮
（とも）（ともそて出比上ろ）
あはたへ乃ゆかちこえ比浦よすまひる海女の見ん旅行の秋かな
きゝい
（たかし）
ありときあかし見の浦よ浮さともかもさらする人もなかん
（あかし）　　　青ぬ寺
あま
君か世に数もしらぬいま河乃みなもとをありなれやむかしてる
あることに比をいはなれてこよひ比見ゆるくことはるの月
人和ゆ代かも川の御ことすすもの八千夜こそいのちに中むすれ（や）
　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　新古今集夏
抄云ふ知すかしよ宇治川比ゆくら水かなく比ひとしてに清る乃
　　読人不知
浮せ
宇治河乃せてまれてよあきの末よ松乃けもともにしるさてるゝ
たの道くるゆきよ乃文よの比あけは道へは細代よ引奥のかゝるなれ

夫木 夫木 万九 同七 同三 家 万七 伊勢集 杉基集

ちくるひをかそへよと宇治河乃わたりにまちかねつらしもそふ

川

夕よりは大河乃みなかみのふかあらし波の立らん（於雑上 人丸 乃たきく 万不同）

河乃せふかみもしらぬかくまたかへりたる河乃常かも（乃ころきく 於下同）

みなれてはいつまてあする早河のせゝにみる人はにくしや（天二 に 万不同 全ノ 万下同）

おほみまもりせ川をはけしみ越ていはゆく流にみなかみぬる（玉雑二 非家持 旅人之歌之）

そてしこね

みなふち清き瀬門の岸かくし小波の底にみえけるをみる君波（浅かし 家）

絶ゆともあとも此河乃はやき瀬もあまたの人のかくふ

ひらへゆかはちゝもつけてもちゝみなかみ

照月乃かつら此河に流れける上下旅のをふねはなそふかゝる（杉基集）

夫木 夫木 万七 夫木 万七 夫木 同 古今四 読人不知 夫木

津乃国の生田乃河のいくたひか君を恋しと我おもはん

今更にはるけき川のなかれてもうきせのかけとえあるなけるそ（新勅雑四 読人不知）

かつらきの河乃川みかきも今はなるふもあかねてるかね

鶴よにつゝ此河の絶えなく見えて今はあかねて宇（新勅雑四 読人不知）

妹かへし出入此川乃せゝをやすわたる妹かあたりは（家 伊 らしそ 万）

こゑ川の底をみつゝうつろふ澄てみけるをかさねて悔しく

むこ川乃ちはやふるあかの絶えなき清きながれ（万四 下にあるをきすこそ）

みな河乃せゝをもかすのえ人の心もみえぬ（世話）

玉河の波さへはまも波みなのとみてあちすなよ（歌仙集）

淀河乃よとむ人を見るさめなたるまてかきむふ

堀江乃したはぬるく此乃かはしのてもみ人よ恋しく

万十九
あさとこにきけははるけしいみつ河あさこきしつゝうたふ舟人

未詳
みなせ河ありてゆく水たえすとも[illegible]

万七
[illegible]万代まても

後撰恋三 陽成院
つくはねのみねよりおつるみなの川恋そつもりて淵となりける

後拾遺巻下
[illegible]

未詳
[illegible]

同
[illegible]

同
[illegible]

万九
[illegible]

未詳
君か代は[illegible]白川の[illegible]流の[illegible]

同
陸奥にありといふなる玉河のたまさかにてもあひみてしかな

同
[illegible]

同
[illegible]

同
[illegible]

万六
みよしのゝ[illegible]の川の[illegible]万代まても[illegible]

未詳
百敷の大宮ちかき[illegible]

万七
見まくほりこしくもしるく吉野川音のさやけさみるにともしく

未詳
[illegible]

古恋五
[illegible]

未詳
[illegible]

同
[illegible]

めつらしき河かせなれやみまくとおもふを人は恨さりけり
みなかみも何とみえましいはせ川やはやせもよかんと思へ
世中はなそやまとなるみなせ河かはりてそめて恋しかりける
打よする類を渡るとつた川の岸におきてなるをもやと
世中はいはねはなけにそあまた河のもとの人は瀬ちかきかるらん
みなかみはまてなるらんたえ川の岸にはてうすくかみなれは
舷人はもとはちるらむ河のみなとの海を恋ひてゆくらん
けふのまの海よりするまて河のまへ月のみそ神よりもまさる
みな河のかみをもとてきたりてかの衣をかさねたる
いなせ川あさくもおもはぬものをいなみしも人はしるらん
ちるる河音にのみてやよそにつれてまつかほなる

いまは河いはをとほしてなみたまてみちくるよ
よしの川ふかきみちなしとてはたちたのかはにこそあれ
いそのかみ世の川のあはれとそおもふきみかたにあるを
こゝろをはおなしくなかす川のおちたちてせきるのみのうへ
たつた川にわたるなみの音にこそとおもへはまさる
なかれてもよとはなかれやうつる川のそこまてもみゆる
あさくはなくて世にもなき川のみなかみをさへみるらん
大井川おちくるたきの水なれてつねにかはらぬ
君によりうき世の川のおもひそわたる音にのみ
うちはへてこゝろのみこそかはるらめ川のなかれは
いそく川のいはきりこえてゆくみつの下に崩れてふかき

赤人　同　同　同　万十　赤人　後撰四 読人不知　赤人　万十　同

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

赤人　万十　赤人　万十　赤人　万十二　同二十 下[illegible]　赤人

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

同　後雑一七条后　伊勢集同后　古雑体　伊勢　貫之集　貫之集不載　五七　同四　同十一　後雑一　伊勢　伊勢集

津の国のなからへかくてゆきあひの橋よあはれ
人わたすことたになきをなにしかもなからの橋と身のなりぬらん
難波なるなからの橋もつくるなり今はわか身を何にたとへん

以上三首

いせ
白雲のたなひくはしの渡りより
けふよりは白露にぬれてふみ見ゆく

以上二首

貫之
世の中はよそにのみしてとをやとる
まつむしの浦の渡りつる橋心ゆく
とてもひとつの橋のかけはしに
あふくみる中のかけ渡しよりやすき橋よあやまたらん

万二十　上総国　万五十　井手　枯拾遺　玄恵　貫之　拾五番　五十一

川

さかはにはやまうちもゆるしもとも紙心を
流る此かたきたわれ山がてを
井手を紀
大井川井せきを越て行水の絶えせぬ物をおもひやる
おほゐ川井せきの水のわくらはにけふはたのめしくれにやはあらぬ
千とせへし浅ちのすゑの紙のなか
大井川井せきのおとのなかりせは
ぬれてゆくむらさきのゝえ
紀の川の渡のやとのもてなし
世のつねに

万十一
わきもこにわかこふらくは水ならは柵こえてゆくへくおもほゆ

同
玉もかるゐてのしからみうすみかも恋のよとめるわか心かも

同七
飛鳥川せゝに玉もはおひたれとしからみあれはなひきあはなくに

家
はやゆき

同
涙河おつるみなかみ早けれはせきそかねつる袖のしからみ

素
[illegible]萩乃花乃なかるゝ川をとゝめつゝかくる柵乃[illegible]

同
大井川心しからみかけてもよ[illegible]

古秋下 春道列樹
山川に風のかけたる柵はなかれもあへぬ紅葉なりけり

後旅 家
水[illegible]

古哀傷 忠岑
家
世[illegible]

貫之

後恋一 読人不知

後雑三 業平集
大井川[illegible]

家
[illegible]

古恋一 読人不知 兼之集
[illegible]

素性
[illegible]

人丸

万三 人麿

武士乃八十宇治川乃あしろ木にいさよふ浪乃ゆくへしらすも

家

河よ宇治川風のさむからん浪の花さへ落まさりける　貫之

家

落たきつせゝの紅葉の百年の姫のたちかへりなん　貫之

同

紅葉のなかれてとまるみなとには白波たちまさる

家

三吉野乃よしの河乃みなかみの瀧のみなそこ　貫之

後撰不載　後雑二　大江房後

宇治河乃せゝのなかれてきみか世に

未考

うち河は流乃ありて青柳の絲かくるてふ人のつまなれ

やすみし

やねよ河風さむく吹は浪乃花さへうつろひにける

おもひやる心はいつもあるものを

万十一　古恋四　読人不知

入江こく舟のつなての絶えぬれは

むは玉の入江乃小松人しれす

未考　小町集

いさり火乃むかしの光ほのみえてあしやの里にとふ蛍かも　貫之

兼之集不載

はる乃日のなかき思ひをつらねても

こゝろとてはかなきものをこえてこし

未考

心もおもほえす秋の夕くれ

未考

後撰 伊勢
伊勢集 下條ニ立り

未考
夫木 雑部ニ立り

未考

歌

同

みなそこにはゆきてしはまれる人にをよひかれ

後撰 雑一 読人不知
いせ乃海にとしへてみるめ乃なき人の心と

あふれてもかけてみる池乃辺にもなはきりやらん

池乃水かなしきかれの岸にかけて波のかくるも今日や

いせ

我せこかまつらむ池さへ此池乃みくさはかれかねやらん

貫之

拾遺 雑上
雨ふると吹松風もきこゆ也池乃汀にまさる浪かな

大和物語
けふの日の池のほとりにたまのかたまかせに

猿沢の池にまかる道にいけのほとりにて

いつもとかくしていつもいくとせの池の水もゆかしき

あさなあさなわかみる池にゆく人をぬなはのくるしき

こととはむ人もなき池の浅き池に成ぬる人の心に

かけてもはやくのこれるふかきまてかれはてぬる

ちぬ池にあゆむむかし乃かけのつきにかくるらん

あさかの池のみちに此池の名のあしの流や縁とこそ

みかさの池にゆくみちにみるかともの池にそ波もなく

なかの池乃うちにて心乃中にみて宮池の池に流る

たゆくともいひてあらは池ようれしくもかなしき

むかしくみし池こそおもひてそなけきもしらで

わかれにし池の中をみるとむかしの昔を恋ひ

あかの人

万三 / 万十一 / 未考 / 古恋三 友則 / 未考 / 同 / 同 / 万十一

玉雑三 赤人
いにしへのふるき堤ハ年ふかミ池乃なきさにみくさおひけり

ぬま

拾恋一 人丸
おく山乃岩垣沼乃みこもりに恋やわたらんあふよしをなミ

未考 万
ゐ草よせてなをもみくさ沼の下乃心をしる人そなき

紅乃色にハ出しかくれ沼乃下にかよひて恋ハしぬとも

いはしとてしのひもあへすみかくれ沼乃あさき乃沼も露そ置ける

かくれちるあをと沼乃かけ濃き真乃いけ乃淵乃紙いはふさん

かくれ沼乃下にかよひてねなれハいかぬをよとにねてあかさん

まくら沼の下ゆふ水ハあさけれと人よ物つはぬてもの

うちま

拾恋四 読人不知
菅根のねもころ上にしけれともけふまてふかき沼のもとかな

三下七首家集 / 未考 / 同 / 家集不載

たのめてもいはれぬさらぬ身はおもひかへる菅乃根のねもころ

菅乃根乃下にかくれて沼もちらぬかもしれてなき水そ

し紀 流しゆき

拾雑春 貫之
春くれハ瀧乃白糸いかなれや結へともなを泡に見ゆらん

同雑上
たちぬはぬきぬきし人もなき物をなに山ひめの布さらすらん

いはねより落る瀧乃糸なれハ絶てもたえぬ物にそ有ける

みつなきて瀧のつらん流てもつきぬ物とやよしくそのまま

山よりも落くる瀧を分て流ても[illegible]

まちわひて風やふくらん瀧乃糸をくりかへしてもちかる

白波やみなかみ遠きなかれくる瀧乃音のかへける

山分ておちくる瀧を白雲のかかるとみてやたちかへる

以上八首　貫之

家
百草乃花乃影まてうつしつゝ音もかはらぬ白河乃たき

後雑一
今ははや水の海し滝こそつとへともまさらしとおもふらむ
いせ

家
みよし野乃山の雲ゐより落くる滝の[illegible]
きんふいかし

古雑上
清滝乃せゝ乃白糸くりためて山分衣おりてきましを

家
王雑二　僧正遍昭
見れはよの[illegible]わたる滝は[illegible]の糸[illegible]
清滝まて

素性
[illegible]流るゝ滝乃絶間なく人にしられて[illegible]

兼之集
いつのまに[illegible]滝津せの[illegible]

素性
打絶ておつる涙のなる滝の[illegible]

古恋三　読人不知
たきつせを[illegible]心の[illegible]人の[illegible]

素性
[illegible]かゝるまてねらんとも[illegible]
かきみなかれ

百首
とし[illegible]

同
山高み[illegible]滝津瀬[illegible]白河の[illegible]

古雑上　業平　伊勢物語
ぬきみたる人こそあるらし白玉のまなくもちるか袖のせはきに

素性
[illegible]乃山[illegible]音羽乃滝の音のさやけさ

後雑一　太政大臣
白河乃滝の白糸みまほしけれとみたりに人はよせしものをや

同　中務
白河の[illegible]

後雑三
いはのうへにつもれるちりもみたれけるけふやこのみにあまるなみたか

同
玄兆滝のしらいとくりかへしたえすなかるる白浪のたま
　　　　　　　　　　　　　　　　清原深養父

古雑上
風ふけと所もさらぬ白雲はよをへておつる水にそ有ける
　　　　　　　　　　　　　　　　みつね

同
落滝津たきのみなかみ年つもりおいにけらしなくろきすちなし
　　　　　　　　　　　　　　　　たゝみね

同　三条町
思ひせく心のうちの滝なれやおつとはみれとおとのきこえぬ

古哥
世中にたえてもすめる物ならはたえすなかれてすむよしもかな

同
みなそこにしつくたまのみたれけりなかれてやまぬ人の袖のまつ

糸浦集　小町集
みなそこのつきもなかれてみつのしらたまかすもしらすそ

万七
もえあかるなみの雨ふりのこるをはおもひそめつゝ人のたのまむ

家集　業平
うつしかな
　　　　　　　　　　　　　　　　そせい

同
よしのなる滝の白いとよにみたれちりかゝるかな

同
ちるはなのよしのゝ山の白雲はたえすそちるかよるの山かけ

拾遺古
うきよのなかにたえぬものはなかれゆくたきのいとのすゑかな

後拾五　読人不知
あまのかはたえすなかるゝ滝の白いとくりかへしみるそのむかし
　　　　　　　　　　　　　　　　伊勢

後拾一
なかれゆく河のせゝにたえすなかるゝ水のうへの人そなきしや

瀑

万十
古恋一 家
古今
古恋四 素性 素性集
古今
同
同
万十一
同

[illegible]山[illegible]の瀬[illegible]ねせとかへるを
（朱）[illegible]のすそぬれぬ 万
貫之
[illegible]まこもかる淀乃澤水雨ふれはつねよりことにまさるわか恋
（朱）伊勢集 [illegible]
[illegible]淀の[illegible]
（朱）[illegible]

ふち

（朱）そこひなき 素性集
[illegible]ふちやはさはく山河乃浅き瀬にこそあた波はたて
（朱）古今 素性集 古今同
[illegible]淵[illegible]
[illegible]
[illegible]淀川の[illegible]淵の[illegible]
（朱）[illegible] 万
[illegible]
（朱）仁万
[illegible]淵乃[illegible]
（朱）[illegible] 万

古今 十二 古 山川 宮女
家集不載
古今
万四
古今
万四 十五 古 柿本 宮女
同

[illegible]まさるらし[illegible]瀬[illegible]山河の[illegible]や[illegible]

せ

[illegible]川の白波乃よるひる[illegible]
川乃世のみ[illegible]まさる[illegible]もんのうき世は[illegible]
伊勢
やかもち
（朱）新勅撰四 坂上
千鳥鳴佐保乃河との瀬を廣み打橋わたすなかくとおもへは
[illegible]
世乃中は何か常なる飛鳥川きのふの淵そけふは瀬になる
[illegible]
（朱）せにを [illegible] 万下同
[illegible]乃淀も[illegible]
（朱）[illegible] 万下同
[illegible]風よ山[illegible]雲の[illegible]

ちつせ門いくまうけるも経ましこかけそてこれハやませ迎
名取河いくせもるなもせともやまともちつとをけ（られい）
あかも門せて乃けも勉あたまかれてもやも勉いさあら称そ（やハしる）
とうしておそ君ゆへいつてま此門のせまむもあらしは

海

いせ乃海の波るふくてもるか此ゆのうらと之独遊流るか北
いつるて世のこれ海となわちん揚す流ま経やまもとると
やまのみすてかてきてきんへにまてもいのやのあつさうてへて
かつまなるすみてる織のあるいかへ海て海のかつもはいは
ふるもやまさそこ海あまさんをあるるあたせさてくる

海とのみまとゐに此津る成をんとのてあきを成るのるる
さかはるとそこのかまくるなかのはあ乃かつはるを君はとつるん
とかやふるか海まかるれたまかしなけましとのてもやあるん

以上二首　貫之

いせ

いま此海の子る此鹿も限あまらのゆ心をるのさらん
なのまでのは牙にもいいしいかのの海もまるの娘とくまを
そ此門添まて浮まかてのの庭かくとさかは郁
波の乃浦よ塩やかの夕されと沼るとてましあるるの
物の海も鶴もあるてま海原の面のに波ませてる白色
浮のゆき

夜
夫木
下雑十六
百七
百七
同
夫木
百七
夫木
同

浦あらく吹ちる波の花とみゆ海よりつゞく雲もしらなみ

わたの海乃奥にもとよせよ浪まてもへのかよはせをたてゝみれ
夫木集上句同じくて下句八あつかたくせん

なき海のあさかれゐにもかへりみるはるかに遠く
をち

あま

あさりする延にとゞめて袖ぬれぬ浪もかけてかへる
あまのとまやかりねの浦の浪まにもあらはれぬらん

わたつ海八津しま心やあまのかるなりあまて海士のうらみはつ

くさの海のあまなのさきのあふなやあかたの浪もたのきはけ

浦とほくいさりするあまのもとさしてあさなぎにあまぞつりする

あまとものいさりの火のかゝりくるかてこゝろをつくしても

朝なぎにあまのかはらもさかりとて波かゝりてなぎさにすれ

いせ

心してむしあけのせとをさしのあたりいあまのふねこぎけり
なかれいきまつ
忠吉 或與麿

すかたやもの乃かたまつてかけあひのまゝにあやしみのぬ

難波がたかるむもかけてなれは風のうちあけのかた

なからくうらかけのあき海士のあまとをすべきたゞむもの
たくなハ栲縄と書り 栲ハ木ノ名也

たくなはの千尋のなはのうちはへてくるしとのみや思ひわたらむ

いせ乃海のあまのさ縄くりかへしくりかへしても人の心を

いせの海のあまのはらはらとへて恋やまん人の心を
まつら

万七
上海巳也

古恋三 読人不知
伊勢物語 業平
六帖 烟巳也

万十一

赤人

同

同

赤人

万十一
六帖 塩巳也

赤人

万七

なはの浦に塩やくけふりの夕されはゆきすきかてに山にたなひく
(一本 万下同)(かねて)

やまくちの女王

新古恋五 万下句同

芦へよりみちくる塩乃いやましにおもへかきみかわすれかねつる
(すり古)(君を忘れかねて)(ちゑ君を思ふ 業方)

い世乃海士の塩やくけふり[illegible]
(ひくき)(うつし 万下同)(いもあれ)

須广の浦に塩やく[illegible]

難波かたしほひのなこりあかす[illegible]

[illegible]

今按万二健男と云ことを切りとちと見せて右本あそこれを荒陸乃塩を折やうにみらそ字をつけしを
けせ哥もまた見る所あり 巳上す
ゆき 字 揭云 云

あゆちかた塩ひの[illegible]沖の[illegible]

古雑上 読人不知

同 同

同雑下

万七
上海巳出

古今
上海巳出

万葉不載

同

家

わたつ海の沖津塩あひにうかふあはの消ぬ物からよる方もなし
(海士)

おしてるや難波の御津に焼塩乃からくも我は老にけるかな

[illegible]

わくらはにとふ人あらは須广の浦にもしほたれつゝわふとこたへよ
(万八 万下同)

須广乃浦に塩やくかまのけふりこそゆきすきかてに山にたなひく
(かまの)(かねて)

わたつ海乃沖の塩[illegible]

しかのかま

山くちの女王

新古恋五 山口女王
拾遺恋 山口女王

塩満はいりぬる浮網のうちはへてのみ恋やわたらん

新古今 撰集 依拠 非 作者 撰不載 不知 何故

[illegible]心もえる道もみちのちゝに此塩海ちかつきれ

いせ

海士舟のかよひ[illegible]

未考
みちのく乃千賀乃塩竈ちかなからはるけくのみもおもほゆるかな

古陸奥歌
わかせこを都へやりて塩竈のまかきの島のまつそこひしき

同
みちのくはいつくはあれと塩竈の浦こく舟のつなてかなしも

伊勢集
塩竈の浦にはなれん舟の音いそしくもあまたは出ぬ

小舟

万四
大舟のおもひたのみて君ゆゑにつくす心はをしけくもなし

古恋一 読人不知
いて我を人なとかめそ大舟のゆたのたゆたに物おもふころそ

万七
みなと江になまつに舟は風はやみ心はおもへ

同十一
むかしやらふ舟子の浦にふるたつみわかいもかめのかけてくるかも

同七
あまをとめかつきの塩のなかにしもあまてらすての浦なれは波たちくる名

後雑三 伊勢物語
なにはつをけさこそみつの浦ことにこれやこの世を海わたる舟

たなゝしをふね

万九
あさなきにこき行舟はたかしまのあとのみなとにはてにけるかも

同
照月を雲なかくしそ島かけに我舟はてんとまりしらすも

ひきふね

同作者集
わたの海はいつまて神のすへならはみ山のおくもはるかなるらん

同十二
あらいその塩せをはへてたてのなきこそあやしかりけれ

浦のまへ

同之 下鈔 玉雑二 読人不知
風ふけは浪ほ真白に立かへし海士乃釣舟こきかへるみゆ

同十一
さよふけて沖へにこくをとてあまの小舟の梶のおとかな

同七
近江の海波かしこみと風まもり年はや経なん漕とはなしに
あまから

後撰恋三 家
かくはかり恋ふるみなとに舟出して浪のまよりそ白きこゝろ人

万之 古大和国 旅
しらぬ山わけこしかともあまの舟のかちもたえすこゝろさしたる

家 古旅
ほのほのとあかしの浦の朝霧に島かくれゆく舟をしそ思ふ
人まろ

万不載 夫木
みなとの浦の朝霧にしはしも見えぬ舟のゆくゑを
沙弥満誓

万十
大船にあまたかはりに漕つなき舟もあらなん

同三 沙弥満誓
世中をなにゝたとへん朝ひらきこきゆく舟のあとのしら浪

夫木
白浪はよする時にあらそひて庭にちりかふ舟もとめつる

万
みなとにはよるへき舟のあまた見えしもゆくへもしらぬ

古秋下 興風 夫木 万
白浪に秋の木葉のうかへるをあまのなかせる舟かとそみる

土佐日記
追風の吹ぬる時はゆく舟の帆手うちてこそうれしかりけれ
貫之

古恋一
しら浪のあとなき方に行舟も風そたよりのしるへなりける

夫木
浮世にはかゝらむとのみおもへとも

同
こきかへる延喜の御舟の沖にいてゝ

万十一
みさこゐるすにゐる舟の夕塩をまつらんよりは我こそまされ

同七
ゆふ[illegible]乃[illegible]あまの[illegible]真砂[illegible]海岸をらしと
浜里

白毫 読人不知
いせ乃海のあま乃[illegible]へてこそ[illegible]

夫木
伊勢の海に釣する[illegible]

万七 上冊已出
風[illegible]真砂白浜[illegible]

夫木
[illegible]あまの釣縄うち[illegible]

万七
志まのあまの釣する[illegible]

いかり

万十一
大舟の香取の海にいかりおろしいかなる人か[illegible]やまん

同
近江の海奥こく舟のいかりおろしかくれて君か言まつ我そ

伊勢集
いせ
いせの海に[illegible]あまのすみかに[illegible]せん
あま

新勅恋一 読人しらず
いせのあまの[illegible]

万十一
住吉の津守の[illegible]

夫木
あまの舟の[illegible]心のかよ[illegible]

同
[illegible]
なみかそ

万十
棹さ[illegible]

同三
見えて[illegible]
あら人

百七 作者不詳
浮乃ちるらのしほなみのうへにうかんとまちら哉

藻

拾雑上 読人不知
もかり舟今そなきさにきよすなる汀のたつもこゑさわく也

新古恋二 読人不知
須磨なるあまの浦乃ちるひまも此心ハ綿よりかゝりまの袖

百十一
人志れぬ思ひのうへの花もかりそめにかへる

古雑下 読人不知
いくよしもあらし我身をなそもかく海人のかるもに思ひみたるゝ

新拾恋 人丸
玉藻かる海人のしわさにあらぬ身の夜のねられぬ

百三
志ら波のよせつるむらのまに若なかえてに摘ぬる

後撰 伊勢
伊勢の海にはへてすなとりこそはかつきいせ

後撰西家 百十一
海乃そこ沖つかぜあて沖つ藻のうへし見えハはこし

松恋五 読人不知
新勅恋一 読人不知
いさり火のよるハ沖つ汐風ふくらん

百三
風ふけハ沖のむ藻のよるへなみ付かたも乃かれん
ゆめもみし

幸彦
沖つ島人ハ根もなきうき藻のあさりの浦にむ藻かゝりて

拾恋一 人丸
ゆきてみる波のよするむさの浦に人もなし

同十一
すかたなる浦風をあら海のなくらむ

同七
世のなかも白波のうへにたゝよふをかなしきかな

同
同
雨ふれるかれ衣のそてのみなかれなむ

同
身をうらみ

興風集
白浪をかけてあまのこく舟もしも今ゆくらなみなかゝかゝ

古恋三 読人不知
大かたはわか名もみなとこき出なん世をうみへたにみるめすくなし

家集不載
たかしまにすまゐしつらくおもひて浦にかへりてゆきつゝみるめなき
うかゝゆ

古恋二
こゝろのみかよへはあまのみるめなき浦によるへしなき

未考
わた津海の底にかはてる月かけを清ててかゝやかしける

後恋五 伊勢集
わか涙をあまやいかゝはくいせの海の浪ならすして海にやなれる

古恋四 読人不知
いせ乃海人の朝なゆふなにかつくてふみるめに人をあくよしもかな

未考
白浪もたちはくらさてあかすまの浦乃みるめはかりにかへしは

白浪のよせくるにあまのかつきてよくつしまする

古恋五 読人不知
うきめのみおひて流るゝ浦なれはかりにのみこそあまはよるらめ
[illegible]

未考
奥津浪よるへもしらぬあまをふねかゝる浦なみ間にもゆけ

拾恋五 閑院大君
君を猶うらみつるかなあまのかる藻にすむ虫の名をわすれつゝ

典侍のなほいこ

古恋五 伊勢物語
あまのかる藻にすむ虫のわれからとねをこそなかめ世をはうらみし

未考
白浪の浦にみるめかるとて沖に舟のりてゆくもある

拾雑下 読人不知 大和物語
あしからしよからんとてそわかれけんなにか難波の浦もすみうき

未考
みくまのゝ浦の松原かくれては[illegible]

同
風ふけは生田の浦のいくたひかあまし心を[illegible]

拾恋四 読人不知 津乃国の生田乃池のいくたひかつらき心を[illegible]

家 古雑上 上海人臣也

忠房

百九

伊勢集

後雑一 家

百七

忠房

同

伊勢の海に釣するあまのうけの如に狎に延へて我はいかなる 貫之
あるとてもとへばこそいへわかのうらのしらなみやとはまされる

小町

夜をうつ浪のうちよせて濱千鳥けふは今ぞなくらん
まてと見えしあまのつりするみるめの貝のいろのまさると思ふらし

よみ人しらず

あまのすむ浦こぐ舟のかぢをなみ世をうみ渡る我ぞかなしき
いかにせむあまのもしほやく浦の煙にもまがふあまの浦わは
浦の海といはれむ君がわたる縁にきもかはる哉
いさゝめに思ひしものをやまかげの浦見て住みそめし

家

忠房

後恋二 忠風
忠風集 但

古旅
兼輔集

百三 長田王

同一 人丸

同九

伊勢

見えもせぬ浦わは遠くあらなくに我のみや人に恋ひわたるらむ
かくばかり逢ふことかたき人なれや伊勢のあまのすむ浦にあらなむ
我が心はあまの浦のたれをかもうらみむとのみ人のいふらん

中納言かねすけ

夕月夜かげ立ち寄りつ行玉のかげに恋ひつつ浦にありなむ
あしきたの野坂の浦に舟出して水島にゆかん波立つなゆめ

人まろ

住吉の浦に来ぬらし海人のとものとよみこそ寄せくるらん
我妹子にあはむと思へばまたこの浦に忘れ貝ひろはん

貝

土左日記
万六
夫木
家集不載 更作者未詳
家集不載
万十一

続後撰恋五 読人不知
伊勢乃海にあまのとるてふ忘貝忘れはてなん人のなさけを

よする浪うちもよせなん我こふる人忘貝おりてひろはん
貫之

拾遺 坂上郎女 雑 に万 る いとま て 以上万
わかせこに恋ふれはくるしいとまあらはひろひてゆかん恋忘貝
坂の上郎女

る も 拾
いせ乃海乃清渚にまさこつみ忘貝ひろふものとみゆく
人麿

新勅雑四 読人不知 仁万下同 北江 らん
いとまあらはひろひにゆかん住吉の岸によるてふ恋忘貝
みつね

あめにて海のそこふかくとも我か思ふ人の忘るへ

住吉の濱によるてふうつせ貝みなき事もて我恋めやも

同
夫木
同
同
万十二
後雑一
夫木
古雑一 読人不知

新拾恋四 読人不知 之 新拾下同 る
紀乃國のあくらの濱の忘貝我はわすれしとしはへぬとも
ためまさ

白浪のよせくる心からなき我をせんこそ忘れ貝

我乃みやあまのかるもとなりぬらん恨はかくれ忘れ貝

何ゆゑか此浦のあまの忘貝拾ふに

し慶

家万
若の浦乃あまの濱乃忘貝

おもえのあさつま

後
まとひしとおもふ我か忘れ貝よるしら浪のまに

いゑるをと別てこそいふ忘貝の絶すと

なみのうつ浦に忘貝ひろふ

後恋三　夫木　古雑上 読人不知　百七　夫木　古雑上 家

続古恋一 読人不知
よしつねや(?)しほやく浦に煙たえ今はたゝ

戒仙法師
あはれ思ひてやみにし紀の国の名草の浦の初鴈
続古恋四 読人不知
陸奥まゐるいつくなる松島のまつにくるしやあはれ
白妙の浦のあまかへしてあまのかゝるまてありし
ひとり海のかさなるあまの白妙の波よせてゆく濱
新勅雑四 読人不知
藻かりふね真潜くる妹かあまの浦まてこくもなし
舟のうちよりの濱のみちにありとけふは蝦を
雨ふりぬ(?)鳥のなかにあまのかはづれは
きそ見れは 家集不同
浦ゆたけ
後拾人丸

夫木　同　夫木 百二 佑國巳六　夫木　百五　百七　同六

しられぬ歌あるにはまくらえねは数あるなし
金木の(?)しらぬ(?)この浦にかゝるみなとかへりつゝ
新古恋一 読人不知
但馬なる雪の白濱もろともにものかはらんやうに
うら濱のかすみてのまにやう袖も浪のうちのあらしそ
はまゆふのかゝるまてそ人もうちよりけふはたゝ濱の
人麿
拾雑秋人丸
我せこを(?)あかしの浜にすてて松ゆへに行はなる濱
拾恋五 読人不知
あふことのなきやまかけておなしさなくいつまちなるこの濱
住吉の松さむ白浪風吹けはまちてもなれ濱
あかし人
夜さむはおもみかはしのひとをのあるをふれて濱

未考

紀乃国の吹上の浜にとまる千鳥何鳴くらん

未考

浜千鳥 後撰雑一 えんへきす

かひなかりけり我まつ舟は見えもせて浜千鳥なかなかに

後撰雑四

鶴もなくなるまて浜千鳥なる身を思へは常ならぬ

あきらて

同

白浪のたちよる浦の浜千鳥あとやなかなかにたのまるらん うちよする かへすみ乃乱 イ

未考

我恋はなにの浦の浜千鳥おもふとしもなき君にあひ見は

八千鳥まよひの浦の浜千鳥君かあそひとこそ聞ける

たちまちよ

万四

みくまのゝ浦の浜ゆふ百重なる心はおもへとたゝにあはぬかも 拾恋一人丸

人まろ

未考

みくまのゝ浦の浜ゆふいくかさね我をは人のおもひへたてん

拾上 雑上 未考 柿本人丸 会

なかなかにみくまのゝ浦の浜ゆふかさねても

いとゝしつまきみくまのゝ浜ゆふは言てかゝる

万四

みくまのゝ浦の浜ゆふ百重なる心は人のおもひへたつる

さ紀

同九

紀の国の浜によるといふあはひ玉ひろはんといひて妹の山せの山こえて 乃 万下同

同七

心なく君を思ひて紀の浦の浜の浦にまち君わかせこ

新勅雑四 読人不知

妹かためたまひろふとて紀の国のゆらのみさきにこの日くらしつ

未考

浜千鳥浦に鳴なる千鳥のさ

いそ

古今秋 新

浜千鳥沖にむれつゝなく声を聞

らしゆき

古雑一
むかしのおもかけいつもかはらぬは磯の浪かけし奥にはなれぬ
浪しゆき

土左日記
風による浪の磯には鶯も春もえしらぬ花のみそさく

後撰三 躬恒
忠岑 躬恒 友則 不載
岩こらぬ心ある人にみゆるその磯の玉藻や今はかるらし

浪

万十一
大海にたつらん波は今もあらん君にこふらくやむ時もなし

家
打よする海浪遠に我思ひのつきせぬものとこそすみよしの
人丸集

家集不載
万作者不詳
住吉の岸に家もか奥にへによする白浪みつゝ思はん

同十一
あさなきに紀津か海によする波のまにまにいふこともなくやみなん

土左日記
立てはたつゐれはまたゐる吹風と波とはおもふとちにやあるらん

貫之集
まつらつきてまたまふ人のなかたゆるしのびの浦のあさき人の心

万七
住吉乃岸の松か根うちさらしよせくる波の音のさやけさ

未万
いつぬてやむ時もなき袖をぬらす心そたえずしてよするしら浪

古恋一
白かはの岸をそらに吹風にてもいとゝ心をたまらぬ浪
もとかな

古秋下
土左 康秀
万万
草も木も色かはれともわたつ海の浪の花にそ秋なかりける

後撰四
家集
上江已出
住の江はまちかくは打よする波のかすよりまさる物かは
いせ

万十二

住吉の岸にむかへる淡路島あはれと君をいはぬ日はなし

同

みをつくし心つくしておもへともあふよしなきは恋にそありける

後撰恋五

侘ぬれは今はたおなし難波なるみをつくしてもあはむとそ思ふ

古今恋二

君こふる涙の床にみちぬれはみをつくしとそ我はなりける

河の瀬もうしほにかゝるみをつくし

たまきはる

万七

なみのうへに

かた

万九

なかれ

土左日記

いつしかといふせかりつるなにはかたあしこきそけてみ舟きにけり

貫之

万十四

夜さりくれはうみをわたりの

万七

みなと風さむく吹らしなこのえにつまよひかはしたつさはになく

家持

土左日記

いつしかとみやこへ

古秋下 素性集

紅葉ゝのなかれてとまるみなとにはくれなゐふかき浪やたつらむ

そせい

万三

なにはかたしほひにたちてみわたせはあはちのしまにたつわたるみゆ

おかしき山霧たちゆく風吹て釣舟とおもひしにかへりて